

探偵ストレイドッグス

凜々

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

こちらは「暁く小説投稿サイト」で書いているリメイク版です。
修正をしたくてこちらで書き上げようと思います。

原作は「名探偵コナン」を題材に、キャラクターや技はクロスオーバーしていきます。
救済もジャンジャン入れつつ犯人も救済しようと思います。

例えば犯人の動機となった出来事を救済しているため恨まず事件そのものが起こらなくなったりとか・・・？

ストーリー上事件の時系列が前後していることがかなりあるかと思いますがご了承ください。（また、時系列は原作通りではないです）

目次

プロローグ&設定	1
第1話	26
第2話	30
第3話	34
第4話	45
第5話 萩原研二	51
第6話	60
第7話 諸伏景光	65
第8話 麻生成実	80
第9話 松田陣平	88
第10話	95

設定2	105
第11話 明智五郎編	110
第12話 明智五郎編	129
第13話 越水七槻	145
第14話 元怪盗団との再開篇	156
第15話 元怪盗団との再会篇②	170
原作へ	
第16話 再開篇③	199
第17話 小さくなった高校生探偵と 自殺愛好家の出会い	225

プロローグ&設定

ここは大都市ヨコハマ

武装探偵社

ポートマフィア

組合（ギルド）

全く違う目的を掲げる三つの勢力は時には協力し合い、時には潰しあいを幾度となく行ってきた。

そして最終決戦終了後

和解をし

平和な世の中で天寿を全うした

筈だった

設定

文豪ストレイドツグス側

オリキヤラ

広瀬翼（男）

20歳（原作開始時）

異能力・・・無限魔法（ムゲンマジック）

能力の総称が無限魔法だが個々の技には名前がついている

武装探偵社時代は創設時からの古株でDMOでの信頼度は厚い

無限魔法の一種である古代書（アーカイブ）による情報収集が主な仕事だが、戦闘能力もトップクラス。DMOにおける最終兵器である。

ある大御所俳優、女優の間に生まれた一人息子だったが物心がついた時から父親からDV、母親からネグレクトを受けておりまともな生活を受けてこなかった。

更に9歳のころ両親の無理心中に巻き込まれて死にかけのちのDMO社のメンバーに救われた経歴を持つ。

壮絶な過去を持つわりに本人の性格は歪まず真つ当に成長した。

現在の名前は救われた際にへ大御所芸能人無理心中の生き残りとしてマスコミに追

われるのを避けるために内務省異能特務課長官の種田の口添えで戸籍を新たに入手、またほとんど両親の面影がなかったこともあり知られることもない。

当時9歳であったが小学校にすら通うことができていなかったため通信教育で学校に通う傍ら、DMOの調査員として働いた。

17歳で通信教育でハーバード大学を首席で飛び級卒業を果たす。

その後も医療資格、弁護士資格、教育免許、操縦免許などあらゆる資格に挑戦しては一発合格する天才、どんな依頼でも行うオールラウンダーである。

なお、一応専門は情報系である。

容姿

色素の薄い茶髪で季節関係なくファー付きフードコートを着ているクールな美青年

株式会社DMO (detective management office)

福沢諭吉、森鷗外が共同で原作10年前に立ち上げた総合探偵事務所(何でも屋)

人や物探し、地域の手伝いなどの小さな仕事からヤクザやテロリスト、悪徳異能力者討伐などの荒事も仕事に扱う他、警察で打ち切られた未解決事件の捜査を請け負う

横浜の中心地に位置しており設立費や電気代やメンバーの教育費など総額130億円する

外見、内装ともに一見どこの財閥の所有物かと思われる場合がある。

また、孤児院も経営中。

開業するにあたり

- ・ 異能力開業許可証
 - ・ 銃刀所持許可証
- を取得している

横浜では警察を頼る前にDMOを頼れと言われるほど評判がいい。(理由は組織で動かなければいけない国家公務員よりもすぐに動いてくれるから)

米国に姉妹提携をしているギルドがある。

政府からの依頼も多い。

大規模会社だが少数精鋭の実力派である。

中島敦

18歳（原作開始時）

5月5日生まれ

「探偵社・西のへたれ」と呼ばれるほど気の弱い男だが心優しく、いざというときには自らを犠牲にしても他人を守ろうとする大胆な行動をとることもある。

今世でも相変わらず振り回される苦勞人。

戦闘では芥川や泉鏡花とコンビを組み遊撃隊として前線で戦うことが多い。

異能力

月下獣・・・非常に大柄な白虎に変身する異能。その体は銃弾すら通らないほど頑丈になる上に、動きが非常に俊敏になり、身体の一部を失っても猛スピードで復元される。また、その爪には異能自体を裂く効果がある。肉体の強化と身体能力の向上や治癒能力を自分の意志で使用できる。

太宰治

22歳（原作開始時）

常に羽織っている砂色のコートと体全体に包帯を巻いているのがトレードマークの美青年。国木田には「包帯無駄遣い装置」、「迷惑噴霧器」、「唐変木」などと呼ばれている。

とてもマイペースな性格だが、頭がキレる上に身のこなしもいいなど実力は高い。

自殺嗜癖（マニア）で、事ある毎にあらゆる手段で自殺しようとするが、毎回必ず失敗して結局死ぬことが出来ずにいる。死ぬまでに苦しむのは嫌がる。今世でも自殺癖、頭脳派というところは変わっていないが前世とは違い織田作之助が生きているためそこまで闇を抱えてはいない。しかし胡散臭さは相変わらずで、どこから情報を仕入れてくるのか（大体翼から）裏社会の事件などをぶら下げてDMOにかえってくるため、国木田や中原など頭を抱える者多数あり。

異能力

人間失格・・・直接触れたありとあらゆる異能を無効化する異能。発動した異能はもちろんのこと、異能者に接触することで発動自体を封じられる。本人の意思とは無関係に常時発動している模様。自身に利のある異能すら打ち消してしまうのが欠点で、与謝野の治癒を受ける場合は、心臓は動いているが脳に血が及んでいないため人間失格が発

動しないという、高度な技術が必要である。

国木田独歩

22歳（原作開始時）

銀縁眼鏡をかけ、長く伸びた後ろ髪を一つに結わえた髪型をしていて、スーツスタイルで身を包むの男性。個性が強いキャラクターが多い中で数少ない常識人。故に周りに振り回されることもしばしば。常に胃薬を常備している。

異能力

独歩吟客・・・手帳の頁を消費することで、書き込まれたものを具現化・実体化する異能。但し、実体化できるのは、サイズが手帳の面積より小さく（国木田自身が手帳より小さいと認識しているもの）、かつ国木田自身が一度肉眼で視認して形状・機能を理解したものに限られる。切り離れた手帳の頁からでも具現化でき、かなり離れた場所でおかつ他人の意思による発動でも具現化できる。また事前に手帳に字を書いておき、敵に開かせ具現化させる罠のような使い方もできる。

江戸川乱歩

26歳（原作開始時）

以前ほどの常識を異脱してはいないがやはりかなりわがままな面がある。しかしさすがに電車の乗り方など生活上必要な情報は網羅している。総合探偵事務所を経営す

るうえで欠かせない大黒柱。事件を推理する過程で被害者や犯人の心情も見抜いており、優れた推理力や自信に裏打ちされているとは言え、情のある言動をする。

一見しただけで、事件から人の過去まで見抜くことが出来る推理力を持つ。

異能力者で構成されている幹部クラスだがその中でも唯一なんの異能力も持たない一般人である。(だが本人は超推理と名乗っている)

本作でも重要な位置づけにおり、彼の推理や予測がたちまち人の命をも救ったりする。

谷崎潤一郎

19歳(原作開始時)

張り込みや依頼の聞き取りなど手下のような役割を担う。妹のナオミとは今世でも兄妹であり過保護、妹が危険な目に合いそうなときは性格が豹変する。(普段は心優しい性格)

異能の特性から潜入や隠密の能力に長け、披露する機会は少ないが後述の通り暗殺にも高い適性を持つ。今世では運転免許、飛行機操縦士資格など操縦に必要な資格は一通り持っており、たちまち運転が必要なときはよく駆り出されている。

異能力

細雪・・・辺りに雪を降らせ、その空間内をスクリーンのようにして幻影を投影したり、風景や自分自身に背景を上書きなどもすることが出来る異能。直接的な攻撃力は皆無だが相当な実力者でもその幻像を見破ることは難しい。

宮沢賢治

14歳（原作開始時） 中学2年生

裏表のない明るい天然な性格で人気がある。DMOでの成績は優秀だが、捜査の方法はかなり独特で、上記の性格による「牛でも人でも、村でも都会でも、素直に気持ちを持せば、通じ合えるものです」という信条と後記の異能による怪力によって半ば強引に事件を解決するため、国木田に「参考ににならない」と言われている。前世で学校に通ったことがなかったため新鮮な気持ちで毎日が楽しいらしい。持ち前の天然で周囲の人（特に同級生）を振り回している。

異能力

雨ニモマケズ・・・怪力と頑丈さを得る異能。自動車を片手で握り軽く投げたり、鉄パイプによる殴打はおろか、無数の銃弾や異能で強化された中也の鉄拳を受けても平然としているなど打撃攻撃がほとんど通らないため、中也は「探偵社の」鬼札」と評した。以前は空腹時の時しか発動しないという弱点があったが今では常時発動中である。

与謝野晶子

25歳（原作開始時）

DMD社の医務担当。相変わらず女性を蔑視する者や死を軽く考える者を嫌悪しており、そういった人間を見ると発言が凶暴になったり激昂したりする。DMO社だけでなく学校の保険室の臨時担当をしていたり病院の非常勤として助っ人を頼まれたりするため主に医者に顔が広い。医療の権化でもある森鷗外に代わり医療学会などにも出席する。しかし、荒くれ者が集うDMO社の治療が追いつかないことがしばしば（社内の喧嘩）あり忙しいのに治療に駆り出されるため只今医療従事者を募集中。

異能力

君死給勿・・・異能の中でも珍しい治癒能力で、自他を問わず外傷を跡形もなく完全に治療できる。

以前は瀕死の状態にしか使えず、異能力を使うために一度瀕死の状態にしてから使っていたが今では瀕死じゃなくても使うことができる。しかし、本人が暴走しているかテションが高いか、若しくは楽しみたい等気分次第では以前のように戻ることも。そのため恐れられている。

谷崎ナオミ

16歳（原作開始時） 高校2年生

谷崎潤一郎の妹。高校2年生で高校に行く傍らDMO社米花支部で事務員をしている。異能力を持つていないが頭の回転が速く機転もきく。

福沢諭吉

42歳（原作開始時）

DMO社の社長。武道の達人で剣道では全国大会等様々な大会で無敗を誇るなどまさに最強王者。知る人ぞ知る「銀浪」である。他にも空手、合気道、柔道、ジークンドウ、中国拳法等武術では軒並みたしなんでおりいずれの武道でも様々な賞を取ってきた。警察学校で武術教官を務めた経験を持つ

異能力

人上人不造（ひとのうえにひとをつくらず）・・・異能の出力を調整し制御を可能にする制御能力。自分の部下にのみ発動する。そのため部下ができる以前は自分が異能者ということに気づいていなかった。

泉鏡花

14歳（原作開始時） 中学2年生

賢治とともに帝丹中学校に通いながらDMO社の調査員として働いている。異能力が強力なため荒事の際前線に送られることが多い。

異能力

夜叉白雪・：仕込み杖を持った白い甲冑武者姿の女性「夜叉白雪」を召喚する異能。瞬時に列車の壁をコマ切れにするなど、非常に高い戦闘能力を持つ。また自由に非物質化することが可能なため、物理攻撃の効果は薄い。

春野綺羅子

事務員

芥川龍之介

20歳（原作開始時）

DMO社で随一の冷酷非道な人間。一番闇をまとっている。通称横浜の狂犬。狂犬の存在は横浜では一般人に周知されており、以前黒の組織が横浜で取引がうまくいかずドンパチを繰り返した際、羅生門で恐怖のどん底に突き落とした。以来横浜では裏社会の者たちの姿はめつきり見なくなつた。それでも新参組織が知らずに来るとお仕置きが待っている。（ちなみに取引の時に戦闘力を間近で見た某銀髪ロンゲは組織にいれようとあの手この手を使つたが赤子をひねるようにボコボコにされた）

異能力

羅生門・・・外套を不定形かつ何でも喰らう「黒獣」に変身させ操る異能。黒獣は空間を含むあらゆる物を喰らい、切り裂くことが出来る。敵を攻撃する「矛」としてだけでなく、銃等の攻撃から身を守る「盾」としても利用することができる。また格子状に変形させた「黒獣」で敵を切り裂く「羅生門・顎（らしようもん・あぎと）」や、「黒獣」を伸縮自在の「黒い『手』」に変形させて攻撃する「羅生門・叢（らしようもん・むらくも）」、自らの体の外筋を黒布に担わせる「羅生門・天魔纏鎧（らしようもん・てんまてんがい）」等、相手の動きに合わせて様々なパターンの攻撃を繰り出す。

中原中也

22歳（原作開始時）

太宰とは犬猿の仲。しかしいざというときはとてつもない連携を見せる。数少ない常識人。しかし、破壊魔王でもある。相当な体術の使い手で重力操作との組み合わせは協力。相変わらず『汚濁』は太宰しか止められない禁じ手である。

異能力

汚れつちまつた悲しみに（重力操作）・・・触れたものの重力のベクトルと強さを操ることが出来る。それを利用して自身がどこにでも立てるほか、触れた相手の重力を自在に操って自由を奪うことも出来る。「汚濁（おぢよく）」形態では完全に異能を解放した

状態になり、時間が経つにつれて体中が黒く染まっていくのが特徴。戦車ですら素手で碎いたり、重力子を集約することで強力な重力弾を発射することができるなど、非常に強力な異能となる。

森鷗外

40歳（原作開始時）

DMO社の副社長であり主に裏社会の事件を担当する指揮官。この傍ら医療の権化として様々な治療方法を開発してきた凄腕医師である。ロリコンは相変わらずでエリスに邪険に扱われている。

冷静沈着で非道なところもあるのは昔と変わらない。

また、「横浜総合医療センター」の医院長も兼務している。

異能力

平タ・セクスアリス・・・鷗外に同行する幼女、エリスを作り出す能力。

織田作之助

27歳（原作開始時）

DMO社で仕事をする傍ら『織田作』という名前で童話作家をしている。太宰のス

トッパー。国木田や中也からは太宰が何かやらかすたびに織田を呼べといわれている。小説の題材を探すためにフットワークが軽く太宰とともに少年探偵団に出会うことが多い。

異能力

天衣無縫・・・予知能力で、自分の身に起こる1分以上30分未満の未来を観測する。奇襲などは通じない

宮下春海Ⅱ宮野明美

25歳 女

本名は宮野明美。志保の人質だったがあることがきっかけで抹殺されそうになるも太宰、谷崎、国木田などに死の偽造を含め救出される。

そして、落ち着き次第状況を説明されここが黒の組織が絶対に近づかないと暗黙の了解となっているDMOであることに驚く。

志保のことは気にかかるもDMOに恩義を感じたことで事務方としてそのまま属することに決める。担当部署は情報管理部門。上司は広瀬翼。

麻生成実

26歳 男

元々は月影島に女医として生活していた。

が、それは家族を殺した犯人への復讐をするためだった。

そこに、翼の情報を持ってすべてを知るDMO社の面々がやってきて、当時の事件のことをすべて暴かれたときは自身が復讐するつもりだったのになんだこいつと思つた。

しかし、麻生圭二の譜面に書いてあつた文面「お前だけはまっとうに生きてくれ」という言葉を見た際には人目をはばからず涙を流した。そして、殺しはできないが他にも社会的に抹殺する方法があると乱歩から出てくる案の数は延べ150件。しかもどれもえげつない作戦である。ある意味自分は優しかったのではないかと思ひ若干犯人に同情。しかし、元々は自分の家族を殺した犯人である。同情は一瞬にして消え意気揚々と作戦に乗る。さらにはマトリも呼んでいたことに用意周到だと羨望する。

え、これは他の仲間がコネを使い呼んだって？他にもたたくさんの仲間がいることに驚く。

そして、犯人たちが逮捕された後これで、協力してくれたDMOの人たちとお別れなのかと若干しんみりする。

しかし、別れるつもりはないだつて？元々は自分をスカウトするつもりで月影島に？しかし、自分は一瞬でも復讐で殺しを考えた身。探偵事務所に入ってもいいのかと悩む、しかし、与謝野の懇願、名前も知れ渡ってしまったが故この島にはいられないと感じており仕事を探さなければと心の奥では思っていたため恩を感じているDMOで自分を必要だといってくれていることもあり入社する決意をする。

そうして、全員で横浜本社に戻ってきたが個性的な面々に驚かされながら、精一杯働く決意をする。

異能者の力には驚いたものの、太宰の異能の影響で与謝野は治療ができないことが自分を必要としていたんだと感じ、もつともつと医療の勉強と太宰の治療に専念する。その姿勢を与謝野は気に行っている。

もともと、月影島では人気の医師だったということもあり面倒見が良く、乱歩や年下である敦、賢治、鏡花も懐いている。

立場は違えど救われた境遇の明美とも仲良くなり次第に親密に……

明智五郎（ペルソナ5）

原作開始時20歳

精神暴走事件の実行犯。認知上の明智からジョーカーらを逃がす際、相打ちとなってナビの反応が消えたことで死んだとされた。

しかし、なぜか横浜の湘南海岸で衰弱した状態で太宰と国木田に発見される。

3か月間目覚めなかったが、目覚めてからはDMO社員として、自身が廃人とした者たちを全員回復させることに成功。それが入社試験だった。

自室は翼の隣であり最も信頼している相手である。乱歩とははじめ距離があつたが、探偵として一番尊敬している相手である。

あることがきっかけでなぜか異能力としてペルソナが目覚めることになる。

そして、二年の時を経て心の怪盗団のメンバーや冴と再開することになる・・・

異能力

・ペルソナ（契約：ナイトウォーカー）：ロビンフットとロキが融合して新たに生まれた悪魔。

泉鏡花などと同じように召還して戦う。

ナイトウォーカーは：銀色に包まれた騎士姿（ナイト）ロビンフットとロキが融合した姿。万能属性のため弱点がない。

〈技〉

- ・大炎上・・・範囲技の炎奥義
- ・ダイアモンドダスト・・・氷結の究極奥義
- ・ジオンガ・・・雷技
- ・ガル・・・疾風技
- ・サイコキシネス・・・エスパーの究極奥義
- ・アトミックフレア・・・耐熱属性
- ・マハコウガ・・・祝福属性
- ・エイガオン・・・呪怨属性
- ・メギドラオン・・・万能属性で必殺究極奥義
- ・十文字切り
- ・スラッシュ
- ・タルカジャ
- ・マハタルンダ 等（ただし明智が指示を出さないため技名はほとんど出てきませ
ん）

元々がロビンフットとロキのため特に祝福属性技と呪怨属性が得意。
しかし、現名前の通り騎士のため魔法は使わず基本剣士として戦う

ペルソナ時とは違い異能力として召喚した際、基本的にナイトウォーカーに戦闘は任

せている。

細かい指示は出さない。

大まかな指示は出す（例：周りに被害は出さな。人質救出優先。おとり、時間稼ぎなど）

ペルソナを発現させている時、明智本人の外見に変化はないが身体能力が大幅に上がる（パレス潜入時と同じような感じ）

召還ではなく体内に宿すことができるようになったため、一人でも身体能力が大幅に上がるようになった。

六道骸 男 24歳

六道輪廻を巡り記憶を持った状態で転生した転生者（転生前は某マフィア）

異能力者ではないが幻覚などは健在。

乱歩や太宰とは15年以上前に出会っておりお互いの出自を報告しあった。

両親はすでにおらず畏のためにスラムで過ごしていたところ黒の組織に声をかけられた。

DMO所属のスパイでコードネームはグラン。10年以上も組織に身を置いているため信頼は厚い。

笑い方はクフフ。

心の怪盗団は1年後のジエイルとの戦い以降本当の意味でのすべてが終わりペルソナに覚醒することもできなくなつて一般人に戻つてゐる。

ただし、モルガナの言葉は理解できる。

横浜総合医療センター

森鷗外が院長を務める国内随一の大型病院。ほかの病院では治せない怪我や余命宣告された病気を治せる可能性があるということとで全国各地から紹介された患者が転院してくることが後を絶たない。

鷗外はDMOの仕事の傍ら様々な医学会にも出席しており、その伝手で病院同士で交流をしている。

異能力には先天性と後天性がある。

種類も2つあり

異質能力：通常の異能力、文豪ストレイドッグスキャラはこちら

魔法型能力：翼がこれに該当し、後から覚えようと思っただらいくらでも覚えられる。

文豪世界の言葉は難しいためコナン世界の言葉で書いていきます。

第1話

ここはとある一軒家

いや、すでに家とは言えないのかもしれない。

そこはまさしく火の海とも言えるほどあたり一面真っ赤に燃えている状態だったのだから。

「つち!!遅かったか!!」

しかし、すぐに気を取り直し水をかぶって炎の中に突入していった。

一方、燃えている家の中では首を吊って息絶えた男女と同じく首を絞められた跡がある年幅もいかなない少年が倒れている。

「・・・・・・・・・・」

少年の体からは不思議なパワーを感じる。

そのおかげか、まだ生きていた。助けられるかは時間との勝負になるだろう。

〈横浜総合医療センター〉

ピッピッピッピ

「どう？ 鷗外先生。」

「……まあ、突入してからまだそんなに立っていないからねえ意識は戻ってないよ。与謝野君もいたから既に命は保証できてるけど」

「そう……」

そう複雑そうに答え少年のそばから離れようとしはないのはかつて「武装探偵者の大黒柱」と呼ばれた江戸川乱歩だ。

「乱歩さんのせいじゃないですよ。全員のミスです」

「太宰……まあそうなんだけどね。はぁーはぁーだめだなあ。やつばあの時よりも推理力や調査力が落ちている」

そもそも、なぜ彼らがあの場にいたかという生い立ちを説明しなければならない。

彼らは以前この世界とは別の世界で片や探偵社、片やポートマフィアとして敵対し時には一時休戦共闘をするなど切っても切れない縁で結ばれていた。そしてすべてが終わりそれぞれが天寿を全うした後、なんの因果か別世界で同じように異能を持って生を受けた。あの頃は異能力者というものは一割にも満たない数字だったがこちらでは3割を超える数字をたたき出していた。それでも違う力を持っていれば迫害を受ける可能性がある。それも強大な力を持っていると……

彼らは横浜の地に大きな総合探偵事務所を設けることがすでに決定していた。これは異能特務課長官の種田の意向である。異能特務課とは警察組織に属する内務省直属のトップ組織である。

今は設立準備に追われると同時に強力な異能力者を探し出して保護することが目的なのだ。

そして判明した矢先にこれである。

「えーと、徳島翔君9歳、多重能力者。見た感じ相当な栄養失調と相当な暴力の跡。部屋から出れなかったのかと思いきや近隣住民が外で頻繁に目撃しています。その時の様子は暴力を受けているようには見えなかったようです。」

「傷を隠してしまうような能力がありそうだね」

「あとは……ワープとか？」

「ほかにもありそうだね。」

なにはともあれすべては目覚めてから決まるだろう。

そしてそれは時間がかからずに起こるのであった。

第2話

翔が目覚めて数日検査に使われた。

「うん。検査は異常なし。問題なさそうだ。ここまで精神上治療なしで問題ないのは奇跡だよ。」

「それで、異能検査は？」

「異能というよりどちらかといえば魔法に近い特性を持つてみたいだね。それも彼の場合、その気になれば複数どころじゃないほどの数の魔法を使えるだろう。」

「もし、それが悪用されれば・・・」

「ああ、こちらで保護が必要だろう。」

「ま、それは説明しなければならぬだろうけれどね」

「大丈夫さ・・・彼、教養は一切受けていないけど地頭は悪くなさそうだから」

会議を終え、再び病室を戻るとそこではにこやかに与謝野や紅葉と話す翔の姿があった。

「翔君、調子はどうかね？」

「大丈夫です。まだ、食べることはできませんけど。」

「それは、しょうがない。少しずつ頑張れば食べられるようになるさ」

「それで君を見つけたとき何があったか・・・それから今後について話そう」

森鷗外からあの時のこと、今後総合探偵事務所を開く準備をしていること。これからマスコミや大衆に追われなかったために戸籍を移動し名前を変えて生活してほしいと思っていること、そしてその力は強すぎるため探偵事務所で働いてほしいことを説明した。どの情報にも翔は真剣な顔をして聞いていた。

「・・・覚悟していたんです。おそらく物心がつく前に何かこの力を使ってしまったんだろうって。顔が似ていかなかったのも輪にかけてしまったんだと思います」

翔と両親の顔は似ていない。もちろんそれでも大俳優・大女優から息子故将来有望な美形なのだが

「……すべて受けます。親とは縁も薄すぎましたからこの名前も変えやすいと思います。ただ……」

やりたいことがあるんです。

そうだった翔の表情は決意に満ちていた。

「行つてしまつたね。」

この病室に翔はいない。

必ず戻るといつて翔は一時外出を求めた。助きたい人がいるといつて。

「まあ、身体的に栄養失調以外は問題ない。精神上不安定だつたら許可出さなかつたんだけどね。」

まあもしかしたらずっと気を張つてい場合はあるかもしれないけれど……

鵜外はこつそり思う。

「福沢社長が一緒ですから、暴走もあり得ませんし問題ないじゃないですか」

そして、数時間後戻ってきたのだった。

疲れたからなのかすつきりした穏やかな寝息を立てる少年と柔らかな笑みを浮かべ福沢の抱いている子供を見つめる女性の姿を。

第3話

戻り次第、再び病院の住民となった翔、そしてその周りでは着々と準備が進められていた。

徳島翔の新たな本戸籍の準備、本名は「広瀬翼」となった。翼も何もせずにお世話になるのは申し訳ないということそのまま総合探偵事務所の調査員となった。これで、最年少探偵の誕生だ。(翼が助けた優美は事務員兼優美のお世話係)また、今まで森鷗外が院長を務めてきた「横浜総合医療センター」との契約、任せられる人員を育て上げるまで副所長と兼任しメインを医療センター側に寄せることが決まる。

一方の翼は今まで小学校すら通わせてもらえなかったという経歴があるが、こちらとしても直接通わせるのは精神上不安なこと、しかし好奇心は旺盛な性格のため学びたいという以降のもと通信教育を行っていくことが決定した。

そして、怒涛の2週間が過ぎ横浜の中心地に総額130億の「derective

management office 通称DMO社」が誕生した（ちなみに大きすぎる設立費用は出世払いで返していく）

主な主要調査員は以下の通りだ。

福沢諭吉　：所長

森鷗外　　：副所長兼横浜総合医療センター医院長

江戸川乱歩：メイン探偵

与謝野晶子：医務室長

太宰治

国木田独歩

中原中也

尾崎紅葉

織田作之助：副業で童話作家

広瀬翼

等々

そして特務課からある情報がおくられてきたのは設立から1ヶ月もたたない時期のことだった。

そして、それはこの先10年以上に渡り情報収集しかかわっていくことになる大きな事件の前触れでもあったのだった。

設立から一か月、今はまだ認知度も低いいため時折来る迷子探しや落とし物探しをしつつ異能特務課権限による未解決事件の捜査をしていた。

そして、最年少調査員となった翼はというと栄養失調だった体を元に戻すため食トレ及び通信教育で小学一年の内容から学びなおし、更には落とし物探しなどの手伝いを精力的に活動していた。またアーカイブという情報収集うってつけの魔法を使用し情報収集活動でメンバーを支えていた。

そんなある日、異能特務課がある情報を持ってきていた。

そして、翼がその任務に抜擢されたのだった。

すると、もう一人の男（おそらく警察官）もやってきていた。

「おい!! 高明なにしているっ!? 早く消防に通報をだな!!」

「!? すみません勘助君。こちら異能特務課の方だそうです」

同じように種田が身分証明書を提示し説明する。

「おいおいこんな炎の中突入するっていうのかよ。」

しかもそんな子供もつれて……

目は翼に向けられた。

「ただの子供ではないので。翼君、いま中はどうなっている?」

翼は集中し神の眼（ゴット・アイ）で居場所を探る。

「……うん。まだ生命力はあるよ。けどそろそろ弱くなると思う」

「わかった。すまないが時間がない。重要参考人以前に命あるものをみすみす死なせるわけにはいかない。」

「勘助君!!」

「つち!! わかった。だが俺もいく。これでも警察だ。みすみす行かせるのをただ黙って

いるわけにはいかないのですね。」

「……いいだろう。すべてはあとで説明する。すまないが諸伏巡査部長は消防と警察に通報よろしく頼む。」

「……わかりました。」

「では翼君。」

「うん。∞魔法：アーマー&水流防御（ウォーターバリア）」

「うお!!なんだあ!?!」

「防御力向上魔法と火の中に突入してもいいようにバリアを張りました。これでほぼ無傷でたどり着ける。」

「!何でもありませんね。」

「ああ。使いどころを間違えば凶器にもなるがな」

さて行くか

そして今回来ていた、種田、福沢、織田、中也そして知り合った捜査一課の山本勘助は炎の研究所の中に突入した。

「うわっひどいなこりゃ」

中は今にも崩れてきそうな雰囲気だ。

「でも俺らがいる。」

「へえーさしずめ攻撃力特化といったところかよ」

翼の魔法を見た勘助は見た目小・中学生に見える少年（中也）にも突入するだけの能力があることにたどり着く。

「んじやまあ始めるとしますか！福沢さんそっちは頼みますよ！異能力：重力操作」

「うむ。」

「ちなみに彼らの所属する企業は銃刀法所持許可証をとつてある」

「それなら十分です。」

「……その廊下を右、その先の扉を左」

織田に抱えられた翼の能力を頼りに突き進む。途中で飛んでくるがれきの破片やふさがれている箇所は中也の異能と福沢の日本刀で吹っ飛ばしたり、切ったりしながら防ぎつつひたすら走る。もちろん入る前にかけてバリアやアームズはしっかり機能していた。

そして

「あそこ!!」

ついに二人の男女が倒れているのを発見した。

「おい!!大丈夫か!!」

すぐに水流防御（ウォーターバリア）の中に引つ張り込み息を確認する。

「・・・うん、まだ生きてる。翼君」

「了解。∞魔法へレーゼ」

「今のは?」

「状態回復魔法。これでやけどは落ち着くと思う。だけど危険な状態には変わらない

よ」

「さて、一刻も早く出るとしよう。山本巡査部長、福沢君。すまないが抱えてくれるか

ね。中原君、破片は頼むよ。」

「ああ、だけど来た道戻るのはなげえな。仕方ねえ。重力操作!!」

すぐそばの壁を異能をまといぶち破った。

そして少し離れた所の車まで戻ってきた。

「患者は?」

「ああ、何とか無事だ。やけどは翼君の能力である程度は・・・治療を頼む!!」

「了解しました。異能力：超回復」

そして治療している様子を目に見ながら種田は電話をしていた勘助に向き直った。「今回は協力を感謝したい。助かった。」

「いえ、助かったんすよね。」

「ああ、治療を既に開始しているし。彼女は絶対的な回復術の使い手だな。それに戻れば医療の権化である鷗外君もいる。まだ絶対とは言わないが死なせないさ。」

「それで、助けた彼らなんだが警察組織的には公安案件になつてくる。本来ならあまり情報を共有することはできないが、今回助けてもらったから、捜査一課の上司にもいうことができない重要案件だ。君たちは交番勤務から捜査一課に配属されてどれくらいだ？」

「どちらもまだ、1年と少しです」

「もし話を聞いてしまえば後戻りはできなくなる。長野県警で捜査一課として勤務してもらうことは全然かまわないが、この情報を上司に報告することは禁じさせてもらう。知っていれば危険があるかもしれない。もし、それでも聞くのならこちらまで連絡をくれ。」

そして名刺を手渡す。

そこには〈derective management office〉と書かれて

いた。

「そこは福沢が所長を務める総合探偵事務所だ。もちろん諸伏巡査部長にも相談して
くるのならこちらから捜査一課には話を通そう。」

「わかりました。」

「くれぐれもこのことは内密に頼む。」

そういつて、その場から立ち去った。

「勘助君ですか……」

「おお……頼んで悪かったな。状況はどうだ。」

「既に消火活動が開始されています。説明は少し作りましたがいいのですよね」

「すまなかつたな……なあ、情報ききに行くよな」

「話が見えませんが、まあ彼らがいなのであちら案件だとは察してます。そのうえで
情報を出してくれるというのであれば、かなり制限はされると思いますが覚悟して
ますよ。」

「だよな……」

そして、この事件をある程度片づけた後、連絡を取るのだった。

第4話

「・・・なるほど、目的な不明な組織か」

「ええ、目的も人数もボスも何一つわかっていない団体でな。噂によると国際的な犯罪者集団で海外にも拠点があるんだとか」

まあもともと公安の管轄ではあるんだがな

本社に戻り次第、この依頼が何なのか改めて聞く。救出した人は医務室直行で治療中だ。

「今も公安管轄ではあるんだが、おそらくこういった組織には異能力者もいる可能性がある」ということで異能特務課にも一応情報が下りてくることになったんだ。で救出した人が組織の重要人物だったわけだ。」

「なるほど、であの方たちが誰かわかっているのかい？」

「彼らは、組織の科学者だ。といつてもどこまで組み込んでいるのかはわからないがな」とその時、

「目を覚ましたよ!!」

医務室に行くと包帯やガーゼをつけており、若干衰弱しているが話が聞ける状態だということがわかる。

「まず、助けてくださってありがとうございます。」

「ああ、どんな人たちだろうと命が救えてよかった。あそこの施設について教えてもらえますか」

「はい、私の名前は宮野厚司、こちらは妻のエリーナです。」

それから、情報交換をするが元々薬の研究をしていたがそれがどういうものに使われるかわからないということ、そしてそれはまだ研究途中で出来上がっているわけではないということが分かった。

（まあ100%確なことに使われないよね。）

（ああ、薬というのは使い方を間違えれば毒にもなるものだ）

ここには医者もいるため、話を聞くうちにどんどん険しい表情になっていく

「薄々気づいてはいたんです。これをこのまま研究を続けていけば大変なことになる

と、それで研究を続けたくないと言ったら……」

「あのような状況になったと」

「聞いている感じ碌な組織ではないな」

「まあ、あんな派手な放火をする組織がまともなわけないでしょ」

「そんな組織に最初知らなかったとはいえ所属していた私たちも同罪です。いかなる処罰も受け入れません。」

沈痛な面持ちの宮野夫妻

「でも、どうします？ 派手な放火ですし死んだと細工はしたので問題ないとは思いますが生きてると気づかれると厄介では」

「そうだな、とはいえないとは思いますが警察で拘束していたとしても万が一組織に侵入されることもなくはない。」

「すまないが頼めるか？」

種田はDMOの面々を見て真剣な表情でいう

「まあ、そうなりますよね。」

「ここなら安全でしょ。」

「これから、セキュリティとかは組むことになりましたが、どこの施設よりも入り組んだ建物ですからまずたどり着けません。」

「い、いいのか？」

「乗りがかった船です。」

「職業柄犯罪組織は見過ごせませんしね」

「あ、ありがとう」

それから、この企業がどういったところなのかある程度説明して医務室を後にした。

「さて、これからどうするか。」

「外から探つても中々情報は出てこない……となるとやはり」

「中から……ですか？」

「ああ、だが中途半端にはだめだ。かなり用心深そうだからな疑われたら最悪即殺害もありあるぞ」

数人がいい人材がないが考え込む。そして太宰はハツとなった。いたのどうつてつけの人物が。

「一人いますね。そういうのに向いてそうな人物が」

「もしや彼か？」

「はい。アメリカで出会った彼ですね。見た目の年齢は今だと自分より1歳年上ですが、12歳のはずですが、彼では世界は違えど？前”を持つています。」

「見た目は子供中身は大人というやつだね」

「確か、そのままギルドに身を寄せていたはずですよ。」

「彼の？前”の特性上潜入にはピッタリですよ。」

もちろん本人の了承はしっかりと取らなくてはならないですが

「そうだな、なら即連絡を頼む」

了解です。

？彼”六道骸と連絡を取り、本人からも了承を受けた。前ほどではないが研究所に嫌悪感を示す骸はこの件についても二つ返事でOKだとのこと。ギルドのメンバーの協力のもと自分を組織がスカウトするように罫を張る準備を始めた。

宮野夫妻をかくまうため、また情報セキュリティ関係上の様々なトラップを仕掛け、更に複雑な構造にするための試行錯誤を行う。これに一番興味を示したのが翼だ。彼は自分の通信教育の傍ら自らなれない漢字などを調べながら技術を習得していく。更にアーカイブもあるためどんどん強化されていった。それだけではなくDMOの仕

事依頼フォームの改善。依頼料の金額設定システムの構築も作り始め、更に後払い130億のため株の勉強を始めた。どんどんITや経済の知識が増え続ける。これでまだ9歳である。末恐ろしい。

その間に長野で知り合った2人との情報共有を行う。警察だからか真剣な表情で話を聞いていた。もちろんすべてを話すことはできないができるだけ多い情報を共有した。

彼らには普段は何もしないで通常業務を行ってほしいとの通達を出し、またここで話したことは他言無用との通達を出した

一応宮野夫妻を紹介し、ここまででひと段落が付いた。

以上が直近のダイジェストである。

第5話 萩原研二

ここは、とある爆弾発見場所である。

多くの警察関係者に見守られながら、グループが爆弾処理に取り掛かっていた。

「……ああ順調だ。今、爆弾のタイマーが止まっているからな。やっぱ防護服はアツツいなあ」

そうして、防護服を脱ぐのは萩原健二、爆弾処理班Wエースの片割れだ

〈油断するんじゃないよ〉

「はは、わかってるって」

爆弾装置のタイマーが止まったことを良いことに防護服を脱いで一服をしている機動隊が約一名いた。

しかし、この時の油断が命取りとなることはまだ誰も知らない。

あれから4年後、骸はスラム街にいたところ組織の目に留まり無事(?)組織に入り込むことに成功していた。

そして既にコードネーム(IIグラン)をもらって活動しており、骸はいわゆる組織の掃除屋(裏切者などの始末)としての地位を確立している。最年少幹部と骸が言っていた。

そして、翼はというと現在13歳。こちらも情報収集では右に出る者はいないぐらい成長していた。そして、現場に出ることも増えてきていた。

そして、今回は森鷗外の病院偵察の付き人として与謝野晶子と共に参加していた。今はその帰りである。

「……………で、……………だろう」

「……………、……………つ……………」

与謝野と鷗外が医学的な話をしているその後ろで翼は携帯で速報を見ていた。

「おや？翼君。何をしているのかね」

「爆弾解除の速報が流れてるんだ。」

「つてそれこの近辺じゃない？」

確かに流れている地名はこのあたりのものだった。

野次馬をするわけではないが少し、速度を上げて走る。近くまで来ておいて見て見ぬふりはできない。警察を信用していないわけではないが万が一爆弾が爆発したらたとえ防護服を着ていたとしても無傷とはいかない。特に医者である与謝野と鷗外にはその思いが強かった。

マンションまで残り200m付近で突如翼が反応した。

「っ爆発する!!」

「少しでも威力抑えられないかい!？」

「っ!!へりフレクター」

少しでも威力を弱くするために光の壁を爆弾の近くに張り付ける。

そして

ドカーーーーン

派手な音を立ててマンションのその階は吹き飛んだ。

目の前で派手に爆弾が爆発した瞬間を目撃した松田は一瞬にして目の前が真っ暗になった。

だが、すぐに同僚に叱咤され萩原を探す。そしてそれはすぐに見つかった。

「萩原!! しっかりしろ萩原!! はぎわらあああああ」

早く、救急車を呼べ!! そう、同僚が叫んでいるのを遠くのほうに聞きながら瞬時に悟ってしまった。

萩は、救急車が来たとしても病院まではもたない。助からないと

その時だった。

「ちよつといいかな。」

「……え?」

「その人助けるんでしよう？」

「つえ、でもこの状態は？」

「でも、まだ生きています。どんなに弱っていてもまだ命がある限り助けてることをあきらめないのが医者だよ。」

「医者……なんですか？」

「そうとも」

そして、立ち上がった人はほかの人にも聞こえるようにこう告げた

「横浜総合医療センター医院長の森嶋外だ。今すぐに処置を行う。大丈夫だ。絶対に助けるよ。」

今から私は重症者の処置にあたるから、ここにいる与謝野医師の指示に従ってほしい。よろしく頼む。

その声掛けにパニックになっていた警官たちはいつせいに動き出した。ところどころざわつきがあるのも自分と同じ心境だからだ。

森嶋外、医療系のニュースでよく耳にする名前だ。医学の権化といわれるトップ医師。横浜総合医療センターで医院長を務め、4年前からは横浜にある総合探偵事務所でも副所長を兼務している凄腕だ。

そんな大先生がなぜここにと思ったりしているがその間にも処置がつづいていた。

「とはいえ、危険なものには変わりないか・・・とりあえずやけどだな。翼君」

「うん（レーゼ）」

翼君と呼ばれた少年が手をかざすと緑色の光が萩原の体を包み込む。そうすると赤みが徐々に消えていくのが分かった。あれが、初めて見る異能という力なのだろうか。

更に、少年はどこからかビニール袋のようなものを取り出し、鷗外先生に渡した、そして、それはみるみるうちに膨らんでいきその中に萩原の体を入れた。何を今からするのだろうか。

眺めているとジーとみられているのが分かった。その視線は先程の少年のものだった。自分が気づいたことに気づいたのか少年はこちらにやってきた。

「お兄さん。あのお兄さんのお友達？」

「ああ、親友だ」

「そっかー」

会話が途切れてしまった。

「なあ、聞いていいか？」

「なあに？」

「あれ、何しているんだ？」

「?あれは無菌室といってね、持ち運び式の手術台なんだ。やけどのほうは自分が治したし爆発前に能力でカバーしたから大丈夫だったんだけど、熱を持ったガラスの破片が刺さっているほうが問題みたいでね病院に運ぶ前にある程度除去作業をしているんだ」

今手術しているのか?というかこの少年はやけどを治すだけでなく爆発前にもカバーをしてくれていたのか。もしそれがなければ防護服を着ていない萩原は即死だったかもしれない、その状態だといくらトップ医師といえどもどうしようもなかっただろう。

「少年。ありがとう。」

「うん、自己紹介してなかった。」

はい!と渡された名刺には「株式会社DMO」と書かれていた。名前は広瀬翼。というらしい。

もう自分はそのことではないというこの少年と共に待つこと数分。先ほどの取り乱しようなどこにもなくまだ危険な状態なのは変わりないのに漠然と既に大丈夫だという認識を持っていた。

そこにもう一人の女医が戻ってきた。

「あ、与謝野さん。そっちはもう大丈夫?」

「ああ、他は多少の打撲ややけどの軽傷で済みそうだ。手当は済んだし、救急車も到着しそうだからもうやることはない。あとは待つだけだな。」

「おや、与謝野君の方も終わったんだね。」

翼と女医が話していると萩原を治療していた森が話に加わった。

「萩原は大丈夫なんですか？」

「ああ、詳しい検査はさすがに病院に行ってからではできないがもう大丈夫だろう。警察にも知り合いはいるが爆弾処理班にはいなかったから認識があっているかわからないが爆弾を処理する際は防護服を着て作業するものだと思っていたのだが……」

「……頭の痛い話です。」

ほら見る萩原!!警察の痴態さらしやがって!!呑気に寝てやがる萩原に悪態をついてみる。

「……まあ、そちらのことに口は挟まないがね」

そこから、救急車が到着し、重症の萩原を優先に、そしてけがをした隊員を乗せ病院に向かっていた。

結局萩原の処分は、始末書と嚴重注意、謹慎処分に落ち着いた。萩原のしでかしたことを考えれば軽すぎる処分だが今までの実績が認められたのだろう。かなりの温情処分だ。

その萩原は謹慎処分を終え既に現場復帰していた。といつても、萩原自身思うところがあつたのか再度爆弾講習の受講、後輩の育成を受け持つことになり現場と内勤半々になつていた。それでも元気に出勤していることに変わりない。あの時多数の命を救つてくれた彼らには感謝しかない。そして、この時に紡いだ縁は後に多大なる事件と再会が待ち構えていることは誰も知らないことである。

第6話

爆弾事件から更に月日がたちその間、着々と未解決事件をこなしつつ民間人からの依頼をこなす日々を送っていた。

最初は知名度が全くなかったDMOも今では神奈川では知らない者はいない、また全国的にも知られるようになってきていた。

この間に起こったDMOとしても大きな出来事といえば三門を揺るがした被害があげられるだろう。

はじめは警察に匿名での通報があつたというものだったが、悪戯だと決めつけ全く取り合わなかつたそうだ。それを聞きつけた異能特務課から念のための確認作業として現場に急行したのがDMOだった。

現場付近にいたとき正直阿鼻叫喚状態だった。既に助からない状態のものも多数おり目も当てられない。

「いまだ猛威を振るっていた怪物たちもいたがD M Oと”正体不明の組織”で何とか撃退し、生きている人は虫の息だろうが全員救出した。」

そして、自分たちの正体に気づかれないようにすぐさま帰還したのだった。正体不明の組織が自分たちに対してどういう対処にするかわからなかったから。

翼は匿名通報が誰かということに薄々感づいていた。また優美もわかったのか目を潤ませていた。

連日報道されているのが落ち着いたごろ、今度は久しぶりに長野の諸伏警部が休暇を利用してD M Oまでやってきていた。

「?弟と連絡が取れない?」

「ええ・・・弟も警視庁の刑事のはずなのですが一週間前に留守番電話が入っておりまして、内容的には警察を辞めるといふものなのですが、その時の言葉の間に違和感を感じすぐに連絡を入れたのですが・・・」

「そのときには既に連絡できなかつた」と

「はい、やめるにしても何度か連絡すれば一度ぐらいつながると思ったのですが」

「その留守番電話を聞かせてもらえますか？」

「ええ……どうぞ」

再生すると確かに思いつめた声質をしていた

「なるほど……わかりました。まず監視カメラに写っていないか足取りを調べてみたいと思います。」

「ありがとうございます。あと、もし警察を辞めたというのが偽りであるのなら……」
「ああ、その可能性もあるのか……そちら方面でも伝手はあるので何とかあります。」
「よろしくお願いします。弟の容姿ですが、客観的に見れば性格はともかく姿はよく似ていると勘助君からはよく言われていますね。」

諸伏警部が出て行ったあと、さっそく会議を開く。

「さて、その弟があまり言えない部署にいるなら監視カメラには映らないかもしれないが念のため翼君、映像を確認してくれるか？」

「了解。」

「あと、骸君に連絡しよう。裏社会やそれに通ずる組織にいるのなら彼のほうが詳しい

はずだ。」

「ええ、そうですね。」

「他のメンバーも依頼中に先程の彼に似た人を見かけたら連絡を頼む。」

「」「了解です。」「」

「(ほう、確かに”彼に似てますね)」

一方、骸は組織に全体招集をかけられたある場所に来ていた。新たな幹部を紹介するということだったがそのうちの一人の顔を見て、ついこの間の太宰からの通達を思い出していた。

「(なるほど・・・確かに”彼”に似ている)」

バーボン、スコッチ、ライ。新たにウイスキーを名乗る3人のうちの一人、スコッチだ。

「(とりあえずあちらに連絡ですかね。)」

後の段取りを頭に組み立てながら自身の自己紹介も無難に終え解散するのだった。

一応ほかの2人を含めた新幹部の捜査を翼に依頼した骸だったが全員がNOCと知り頭を抱える羽目になるのはすぐのことである。

余談だが、弟：諸伏景光の居所はすぐさま兄：諸伏高明に伝えられ、陰ながら見守つてほしいと依頼されるのだがその仕事も骸：グランが受け持つことになるのもすぐのことである。

第7話 諸伏景光

ここはとある廃ビル……

太宰、中原は骸の幻覚に隠れ成り行きを見守っていた。

見つめている先では男二人で言い争いが起こっている。

君はこんなところで死ぬ男ではないと片方が言ったりしているが、

「そうか、拳銃を自分に普通に打てば自殺できるんだ！」と太宰が言い放ち中原にけられ
ていた。骸は楽しそうに見ている。

もちろん幻覚の中、外に響くようなことにはなっていないが

「太宰いい加減にしろよ。これは重要任務なんだよ！」

「わかってるよへ翼君まだ撃つちゃだめだよ。撃つのは双方の手が拳銃から緩んだ時
だ」

〈了解〉

翼も別ビルからスコープで覗いていた

狙うは拳銃一本だ。

その間に双方所属を明かしたりしているが徐々に自殺しているほうの思いが弱まり手を放そうとしているのが分かる。

しかし

カンカンカン

「!?」

今度はFBIといったほうの意識がそれたのが分かった。追ってが来たのを察したのか再び拳銃を握りしめて……

とはならなかった。

その直後に翼が拳銃を弾き飛ばしたのだ。

まさか攻撃が来るとは思わなかったため2人は固まった。

その直後

バン

「スコッチ!! ツライ!」

「っ!! バーボン!!」

「スコッチはこちらで始末しますから!! 貴様は手を引け!!」

「待て!! ライはFBI!」

「はあ!」

本来長々と同じ場所留まるのは危険なはずなのに一向に動く気配がない。こいつら本当に大丈夫か。

スコッチが明らかに困り果てている。

(少し状況動かすか・・・中也、彼らが気づくように殺気よろしく。)

(つち! 命令すんじゃねえ!!)

言葉ではそっぴいっつも少量の殺気を放つ。

「「「「「!!!」」」」

誰だ!! 一斉に警戒をする。

さすが優秀捜査官だ。

そこでかつこよく登場……かと思いきや

「ほうほう、今度は銃で自殺もいいねえ。今度試してみようかなあ」

語尾にハートマークが付く勢いで呑気にそのたまいながら登場した太宰だった。先程までの雰囲気はどこへやら。

通信を聞いてた翼含め（。ㇿ。）ポカーンである。

付き合いが長い故、復活が一番早かったのは中原だ。

「!!てめえまじでいい加減にしろよ、この青鯖があ!!」

思いつきりドロップキックをかましたのだった。

その迫力によりやく我に返るウイスキートリオ。

「何者だ!!」

しかし、その問いに答えることはなくいまだに騒がしい二人。

徐々にあきれ始めていると

バン!!

銃弾が太宰のすぐそばに着弾したのだった。

それにウイスキーたちは驚くが狙われた側の2人は驚く様子がない。

「ちよつと翼君?今明らかに狙ったよね?」

〈太宰さんしか狙ってませんので安心してください〉

「何一つ安心できる要素ないよ!」

「話が進みませんのでいい加減にしてください。中也さんも止めるはずのあなたがヒートアップしてどうするんですか」

「……すまなかつた」

「ああ、自分たちはこういうものです」

ようやく自分たちの正体を明かすためDMOの名刺を相手に投げつけたとつさに受け取る

「……なぜ、投げる必要があった?」

「お互い近づかないほうがいいと思って♪」

「[[[[[[[」

相変わらずな太宰の声にその場にいる全員がため息をつくのだった。

「DMOというのは?」

日本に明るくないライ：赤井はピンときていないようだが日本警察であるスコッチ：諸伏とバーボン：降谷はその企業を知っていた。

「DMOというのは横浜を拠点にする探偵事務所だよな」

「ライ、あなたも知っているとありますが、横浜は現在あのお方の命によつて立ち入り禁止になっていますよね。何も以前取引をしようとして妨害され、その後も組織に甚大な被害が出たとかで……」

「その妨害者をジンが気に入つて引き入れようとしたが、するたびに抵抗されジンも組織自体にも相当な被害を出し、ボス直々にジンに接触及び横浜立ち入り禁止令が出されたと聞く。」

「正直こちらとしてはざまあとも思いましたがね!!」

「バーボン」

イケメンの悪徳顔披露にやれやれとあきれ顔のスコッチである。

そのやり取りを聞きながら

「まあ芥川なら容赦しねえだろ。横浜で事起こしやがったわけだし」

「まあうちの狂犬だからねえ」

（（………それもDMOなのか!!!））

組織の脅威となっている男もメンバーと知り驚愕の表情を浮かべる

「さてと、じゃあ行きますか!!」

「え、行くってどこに??」

「え? DMOの本社だけ??」

完全に警戒していた雰囲気はなくなっているが今もなお廃ビルの中である。

3人そっこのけで移動しようとした太宰に素っ頓狂な声を上げたのは諸伏だった。降谷と赤井も似たような顔で固まっていた。

そのような様子に中原はため息をつき

「おい、まだ何も説明してないだろ。」

「ああ、そうか・・・これからのことを説明しなければならぬわけだけでも、とりあえず安全な場所に行かなければ話もできない。ここもいつ組織の人が探りに来るかわからないからね」

太宰のその言葉にスコッチは大きく反応した。

「そうだ、早くしないとグラランが来る!!」

組織では処刑人の名を馳せているグラランの名を出すとほかの2人の顔も強張った。

しかし悲しいかな、既にその本人はこの場にいる。隠れている骸は内心大爆笑であ

る。

太宰も中原も当然いまだこの場所にいるのを知っているが見方だというつもりはなかった。

「ああ、そのためにもひとまずは少し遠いがうちの本社に避難しよう。」

「横浜は組織の眼から一番遠い地域だ。芥川があれこれ威嚇してくれたからな」
にやりと中原が笑う。

先程の話も含めて進言した。

「行くう!!」

「スコッチー!」

「どのみち逃げ続けても捕まる。それなら行くほうがいい。」

バーボンはこのまま頼っていいのか迷っていた。しかし、横浜が一番安全なのは組織に身を置くものとしても事実であり、実際のところ降谷はゼロに入り組織を追い始めた当初に直属の上司に聞いたことがある。

警察組織とは別に日本政府の内務省直属独立組織の異能特務課でも追っている事案であることを、そしてその異能特務課とのつながりがあるのがDMOだということ。

結局のところ正体もわかつている彼らは信用に値する人物たちなのだ。

赤井にとってもスコッチは死ぬには惜しい人物である。それを助けてくれる申し出

があるのはありがたいことである。赤井自身日本警察の降谷と諸伏ほど知っているわけではないがFBIとも深いつながりがあるアメリカに本社がありで世界各国に支社がある大企業グループ“組合（ギルド）”はDMOの姉妹企業だ。そのつながりで多少知っていたこともあり申し出に応じることにした。

「決まったね。じゃあ中也、それと翼君。あと頼んだよ。」

「はあ、了解」

へわかった。あと念のため近くにあるすべての監視カメラを写らないように細工したから」

「さすがー。うちの情報スペシャリストは頼りになるねえ。」

「おい、織田作にも連絡入れた。迷惑かけるなよ」

「かけるわけないじゃん。中也相手じゃあるまいし」

「てめえ!!」

蹴りを入れるがひよいつと躲し太宰は3人を連れて出て行った。

「はあー」

「大変だね、中也さんも」

「クフフフ、少し見ない間にずいぶんはっちゃけましたね」

中原の深いため息を合図にずっと姿を隠していた骸が幻術を解き、ルーレで翼が廃ビ

ルに移動した。

「太宰のあれは今も昔も変わらねえよ。それよりやることはさっさとやるぞ。」

「わかってますよ」

「これ、梶井さんにもらった檸檬爆弾。」

「サンキュー。」

「そういえば、今日つて梶井さんに誘われて萩原さんたちがうちに来るんじゃないかなかったです」

「あ……」

骸は有幻覚で死体を作り出し、中也是檸檬爆弾を廃ビルに取り付ける。

翼は移動係だ。

偽装工作が終わりそうなところで翼が肝心なことをつぶやいた。

降谷と諸伏は萩原、松田と同じくらいの年代だったことを思い出しもしやと思ったが何とかなると思いきえないようにするのだった。

そしてその場を離れた直後廃ビルが崩れ落ちたのだった

太宰に連れられDMOにやってきた三人は数年越しの再会を果たしていた。

「『『あ……』』』」

萩原、松田、伊達の三人である。

ちなみにだが太宰は移動中に梶井に連れられてくることを思い出したのだが何とかなるよねーとのんきに考えていた。

萩原と松田は3年前の爆破事件以来の関係を続けており（主に梶井との爆弾処理合戦）伊達は萩原が連れてきていらいちよくちよく連絡を取るようになっていた。

さすがにここで問い詰められることになり白状することになったのだった。

「うわー……そんなことがあったのか」

「諸伏は大丈夫なのか。」

「いや、まだ正直安心はできない。だからまずはスコッチの死亡偽造をする。仲間が偽装している真つ最中だ」

「ごめん、何から何まで」

「気にするな、こちらも君に関しては依頼を受けてたんでな」

依頼という言葉に一斉に反応する

「依頼……というのはなんだ」

「いやちよつとまで、その前にお前誰？」

「これは失礼した。FBIの赤井秀一だ。同じ組織に潜入していてな」

「その話も後だ。依頼のことも後で詳しく話すがお兄さんに潜入前に仕事辞めるみたいな留守電残さなかつたかい?」

「え?!なんでしってるの?」

「お兄さんは以前初めてこの組織の存在を知った事件で一緒になってね。だから黒の組織のことも説明している」

身内の大切な兄が危険な組織を知っていることに青ざめる景光。その様子をみてほかのメンバーは心配そうに見ていた。その様子を知っているのかいないのか太宰は続ける。

「DMOや異能特務課から言わせてもらえばある程度一定の人に情報を共有するのは間違えじゃない。もちろん一般人情報開示は危険でも部署が違うだけで高明さんは警察官だ。それに景光さんがNOCだと知られた以上高明さんに教えたのは間違えじゃない」

その言葉に降谷はピンときた

「そうか!ヒロと高明さんの容姿はよく似ている。」

「うん。ただでさえ片方がスパイで死亡したと思っっているのに同じ顔を見かけたら生きてたのかってなるだろう。何も知らないのに急に狙われるのと知っていて自己防衛も

しやすくその手の管轄と連絡が取りやすくなるのとじゃ危険度も変わってくる」

「うん……分かってる。」

「安心してよ。これはあくまで異能特務課の判断だから責任はとるし」

「勝手に巻き込まないでくださいよ。太宰君」

「安吾が来たの？」

「何ですかそのいやそうな顔は……まあいいでしょう。僕は異能特務課の坂口安吾とい
います。太宰くんの言っていることは概ね間違いではありません。無知は罪とでも言
いますかそこが危険だと知らなかったから興味本位で近づいたとなるのが一番怖いこ
とだと思っています。とくに近い人が危険なところにいるのに何も知らないのは嫌だ
と突っ走られるのが嫌なんです。高明さんと勘助さんは聡明な方ですから信頼できる
との判断で伝えたわけですが、ある程度情報を開示することで行動を抑止することも目
的の一つでもあります」

「ああ、確かに再開したのに何も言わずに遠ざけられたら勝手に調べるくらいはしそ
うだよね……陣平ちゃんが」

「俺かよ!! まああとついたりしてでも突き止めようとぐらいするわな」

「お、お前ら」

「ま、そういうことだな。縄張りだ管轄だあるのは承知しているが。知ったからには

頼ってくれよ。そうしないと特に松田に何されるかわからないから」

「おい!!」

「あはは、よろしく頼むよ」

一人蚊帳の外にいた赤井は微笑ましそうな顔でうなずいていたがそれに目ざとく気づいた降谷が威嚇するようん吠え景光がなだめるといった光景を見せ、他3人はデジャブを感じたのかなんとか。

その後翼が戻ってきてきて死体偽造したデータを赤井の携帯にアーカイブで送り送信してもらった。

「そーいや、なんでばれたんだ?なんかミスでもしたのか?」

「それが、全く心当たりがない」

「最悪なことが思い浮かんだんだが……」

「ああ……」

「俺も……」

「もしかしたらいるかもな、身内に」

「調べるなら協力するぞ」

「ま、中の外の俺ら。中の降谷に完全外の赤井さん。あちこちたたけば出てくるんじゃない」

ねえほこりが」

「いっばい貯めてそうだな」「俺もやるよ。埃たたき」

ここに怖い連合軍が結成。大量なほこりが一斉にたたき出されるのも時間の問題である。

「まあ、一斉摘発が完了してから高明さんには報告するかな」

怪しまれないうちにと赤井、降谷は組織に戻り、景光はそのままDMOで匿うことが決定した。

そして、戻る前宮野夫妻にも合わせたが降谷が泣き崩れることになり一同あんど口を開けることになった。そして赤井の母親となるとエレーナが姉妹だったこともあり現在彼女＝明美といとこだったことで相倒仕掛けて大慌てになったことを追記しておこう。

第8話 麻生成実

「……………うん。やっぱりほしいよねえ。」

「太宰の阿保が毎回どっかけがを負ってくるからな。」

「つたく、あいつ自身与謝野さんの異能が効かねえのに」

「やっぱりほしいよなあ……………医者が……………」

カタカタカタ

「どうだい？調査できてるかい？」

「うん。乱歩さん。やっぱりアタリだよ。あの事件は無理心中じゃない。無理心中にしては不自然だな。」

「ふうん……………てことはこの人たちによってかな。」

乱歩と翼は今まで警察で解決した事件の整理をしていた。

DMOでは未解決事件や一度解決した事件に不自然な点がないかを洗い出す権限が付与されている。これも異能特務課の特権？今まで警察に恩を与えてきたが故の信頼からなるものだった。

「それにしても乱歩さんが今回事件整理に来るなんて珍しいですね。」

「んー。社長が褒めてくれるし、駄菓子くれるって言うてたしそれに・・・今回自分の推理が告げているんだよねえ、行く先に医者にふさわしい人材がいるってね」

「ああそういえば太宰さんの件で与謝野さんが嘆いてましたね。国木田さんも頭抱えてました」

「まあ太宰だし」

どんよりとした空気を同じ事務所にいる乱歩も翼も感じていた。

だからこそ仕事先でいい人材がいればスカウトをしようとかかけているのだ。

以前ではわがまま気質だった乱歩も生まれ変わって大人になったのだ

駄菓子好きは変わっていないが。

「まあ、行ってみますか」

「？月影島へ」

船を乗り月影島にやってきた。

やってきたのは乱歩と翼と、

「いやーまさかこんな早く外出できるとは思わなかったなあ」

諸伏景光である。

潜入捜査を離脱して半年足らず、萩原、松田、伊達、組織の中では降谷、赤井、骸、完全外のDMOからは翼、更には異能特務課も監査として参戦している大規模な警察組織の埃叩きは絶賛慣行中である。

ちなみに完全警察内部の萩原、松田、伊達だがこんなことしていいのかとの問いには、

「友が売られたんだ黙ってみているわけいかないだろ。」

「自分たちもいつ同じ目に合うかわからないしね。そんな連中いないにこしたことはないでしょ。」

「あしはつかないようにするから安心しろよ」との頼もしいお言葉があった。

一応万が一が起らないように翼が待機している。完全な職権乱用状態だ。張りきりように諸伏は涙をしていたりするがそれは知らないお約束である。

ちなみに余談だが高明には生存報告はしたものの理由は説明していなかった。おそらく説明するともれなく長野県警も参戦である。

このようにそれぞれが忙しい合間を縫って捜査中なわけだが、早くも諸伏を連れだすことに成功していた。諸伏の先輩：風見を通じて降谷からあっさりOKが出たのである（諸伏の生存を知っているのはDMOとあの場にいた面々の他では風見だけである。また風見も厳選なる調査の結果安全であることが保障され風見自身も生存を知った時泣いていた）

諸伏はトレードマークのひげを剃り、黒髪イメージを変えるため茶髪のウィッグをかぶり伊達メガネで変装をしていた。万が一があれば翼がフロアに入る。

場所が月影島という都内からも離れた孤島だということもOKが出た理由だった。

降谷曰く「お前も警察官だ。こもってばかりじゃなくて捜査の手伝いをして来い」とのことである。

ということでは3人ではるばるやってきたのだった。

早速捜査の基本聞き込みをしていく。しているうちに浅井成美という女医にあったが乱歩が男性とすぐに見抜いたり（ちなみに翼もわかつていたが諸伏はわからなかったため若干落ち込んでいた）すぐに実の息子だと見抜いたりとひと悶着があつたが事件の全貌が明らかになっていく。

最後に公民館の金庫の中にあつた父親：麻生圭二の手紙に「お前だけは真つ当に生きてくれ」というメッセージをみた浅井成美否麻生成実は

「最初はもし真実が分かつたら復讐しようと思つてたんだ……でも父さんはそんなの望んでない知つちやつたらそんなことできない」

「うん、それがいい。もし復讐したとしてどんなに反省もせず絶望もしないままになつてしまうからね」

「まあ真実を知つた今何もしないわけないけど」

「殺さなくたつて絶望させることなんて簡単だし」

そんなことを顔色変えずにいう彼らを見てもしかしたらこつちのほうか怖い？と思つてしまう成実だった。

「翼。もう連絡はしてあるかい？」

「うん。少し前に関さんには連絡入れた。すぐに青山さんと泉さんをよこしてくれるつ

て」

「じゃあそろそろはじめようかな」

「え？だれ？」

「麻薬取締官。ま、当然だな。それにしてもマトリのエースか……。噂には聞いたことがあるけど相当優秀らしいな」

そして当時のことを知っている人を集め真実を話す。犯人たちは散々わめき認めずにいたが乱歩がことごとく論破していく。乱歩からはどんな頭が切れても逃げられないのだから無駄な悪あがきである。

途中犯人の一人亀山が心臓発作を起こす場面もあつたが翼の異能で回復&延命措置をし、成実が応急処置することで事なきを得た。成実にとつては遺族と犯人という

間柄だが、「罪を償ってもらわなきゃ困る」ということで処置をしてくれた。

その時の成実の表情はつきものが取れたという表情をしていた。

その後すぐに連絡をした通りマトリの青山と泉が到着し確保しさらに殺人も犯しているということで捜査一課とも連携をとるそうだ。

そして成実の今後だが

「成実さんは今後どうするの？」

「うーん、さすがに島にはいづらいよね」

「だったら、DMOの専属医者になってくんない？」

「実は本題はこれだったんだけどね」

成実にはスカウトに来た経緯を話す。

「てなわけで異能力者ではない医者が欲しくてね。」

「うちには森さんがいるから学びたいなら『横浜総合医療センター』や系列他病院での研修もつけるよ」

「森さんに許可ももらってないけど大丈夫か？」

「頭を抱えてた中に鷗外さんもいたから大丈夫でしょ。このぐらい許可出すでしょ」

成実にとつてもかなり魅力的なお誘いである。どんなに月影島が孤島であろうと本島の情報は入ってくるのだ。当然DMOのことも横浜総合医療センターのことも森鷗外のことも知っていたのだ。

最終的にはほぼ即決だった。

しかし懸念もあった。月影島には医者が成実しかいない。つまり医者がいなくなるのだ。新しい医者を見つけるにも事件が終わりかなりの速捕者が出た手前すぐに見つかると思えなかった。

そこで翼はすぐに鷗外に連絡を取った。医者スカウトするのに成功したことその弊害で問題があることその内容について簡潔に説明した。

すぐに自身が医院長を務める横浜総合医療センターと全国にある系列病院から常駐はできないまでも医者と看護師を巡回させることを約束したのだ。

そして現村長にそのことを説明し巡回医者が来た際の滞在先として麻生成実が医者として過ごしていた建物を使わせてほしいとお願ひし快く了承してもらうことに成功した。

そして成実を連れてDMOに戻り紹介をすると与謝野をはじめとするどんよりと頭を抱えていた者たちがすごい喜んだことは言うまでもない。

第9話 松田陣平

米花中央病院、ここは横浜総合医療センター系列の総合病院である。ここでは定期的
に森鷗外の医療講義が行われてきた場所である。本日は鷗外は忙しいため与謝野晶子
が代理で講義を行う日であった。そして麻生成実の医療研修最終日でもあった。

麻生成実、訳ありのDMO専属医師である(前回参照)。あれから早2か月。DMO内
で医療勉強をしながら約東通り系列病院で研修に励む若手医師であった。

「どうだい？研修のほうは？」

「おかげさまで、在学中の研修や孤島の医者だけでは見えてこない部分も見えてきま
す。」

片や講義終わり、片や研修終わりの与謝野と麻生が戻る際に話していた。

「さて、もうそろそろ中也の病院巡回も終わるだろうからねえ」

「うちは病院の巡回もやっているんですね」

「私たちが講義に行く場合や病院に用事がある場合だけだな」

そういつていると電話がかかってきた。

「噂をすれば……」

ピッ

「中也かい」

「ああ、悪いんだけど○○の場所まで来てくれないか？」

「何かあったのかい？わかった。すぐに行く」

「どうしました？」

「トラブル発生したらしい。そこまで来るようにだよ」

そういつた与謝野はすぐさま歩を進め始めるのだった。

中也が怪しい人(?)を発見したのは巡回が終わりエントランスに戻った後のことだった。

待っている間何気なしにあたりを見回していると。黒服でサングラスをかけた表情がどこことなくにやにやした男が紙袋を持つてそれを置こうとしているところだった。どう見ても患者や見舞客には見えず、また長年の勘も働きの紙袋をのぞいてみることにした。

「(・・・・・・・・爆弾かよ)」

ピッ

「翼か?米花中央病院で爆弾を発見した。ああ・・・悪いんだけど萩原か松田に連絡して周辺の防犯カメラを調べてくんね?黒服だがあたりを見渡したそれとない男がいるはずだ。与謝野たちが戻ったら後を追う。」

そして今に至るのだ。

「待たせたね。」

「ああ、今回呼んだ元凶はそれだ」

紙袋を指さす。

2人はそれをのぞき込み納得した。

「なるほどね……」

「爆弾……ですか……」

「そういえば今日があの日だったな」

「ああ……既に翼経由で萩原か松田に連絡。おそらく萩原のほうだと思いがしてもらって周辺の防犯カメラの洗い出しを頼んである。俺が爆弾男を追うから爆弾処理班が来たら状況説明をしてほしい。」

「了解。」「任せてください」

その言葉を聞き、中野は出て行った。

しかし成実にとってはあの日というのが引っ掛かっていた。

「成実は4年前マンションが爆弾で倒壊したのを覚えてないか。」

「確か……記事になっていたはず。相当警察がたたかっていたのを覚えています」
「ああ、その事件が日にちが今日、11月7日。それから毎年数字が減っているんだカウ
ントダウンのようね。3、2、1と去年まで来ていて。今年……」

「0……」

その言葉を言い終わつたと同時に萩原がやってきた。

「与謝野さん、例のは？」

「その紙袋だ。相棒はどうした？」

「じんぺいちゃんなら伊達のとこにFAXがこなかったか見に行つた。」

「なるほどねえ。FAXが来れば同一人物、FAXが来なければたまたま同じ日に起

こつた別事件の可能性ありと……」

「そういうこと……構図は……あの時と一緒か」

「そうか……」

「翼君から聞いたけど今中原が追つてんだよな。」

「ああ……おそらく上からだけだな」

「なるほど……」

その声を皮切りに爆弾処理を開始するのだった。

一方、男を追っていた中也是は与謝野の読み通り上空から視認していた。

そして、男がコンビニに入るところを見計らい近くに降り立った。

「中原!!」

「松田か」

「今どんな感じだ？」

「そのコンビニに入っていった」

「まだFAXは来てないが・・・」

「なら、コンビニで出してる最中かもしんねえな」

「その通りみたいだぜ」

松田の携帯を除けば伊達からでFAXに書かれた内容が、添付してあった。

「ならば容赦はしなくていいよなあ」

手をゴキゴキ鳴らしながら凶悪な表情を浮かべる松田に思わず

「・・・・・・・・お前が捕まんないようにな」

犯人に同情してしまうのだった。

そして、何も知らない犯人がコンビニから出てきた時を見計らい

「よお・・・・・・・・」

詰め寄る松田の姿はさながらヤンキーにしか見えないのだった。

そして数分もしないうちに怖さから泡を吹いて倒れた犯人の姿ができあがるのだった。

「………何で倒れているんだ？」

「さあ俺はなんもしてないぜ」

「………中原」

「……確かに手は出してなかったな」

手は出していなかったがぼつと見どころが悪か判断付かないような光景があったことは心に留めておく。

伊達も中也の言葉に容易に想像がついたのか深くため息をつき犯人を回収していたのだった。

ちなみにそんなやり取りの間に翼や太宰によってFAXの暗号が解読されており、それをもとに松田は現場に急行、FAXに書かれた場所・観覧車で爆弾を処理。

途中で爆弾に別の爆弾の在処が書かれた暗号メッセージが映し出されたがそちらは萩原によって既に処理済みだったためスルーし問題なく処理を行った。

第10話

「はあ？ぜってえ無理だろ!!」

ある日の午前中、諸伏の叫び声から始まった。

「FBIは何考えてんだ!?!そんなの自殺行為だろ!?!」

本日そろいもそろってなぜか非番だった萩原、松田、伊達がDMOに到着するとなにやら大騒ぎしている諸伏と不安そうな宮野夫妻がいた。

「おいおい、なんか騒がしいな。」

「諸伏が一人暴走状態なんて珍しいな」

「何かあったのか?」

「ああ・・・よく来たな。これから少し頼みたいことがあってな」

まあ、今の状況の内容なんだが・・・

国木田がそう前置きをおいて話し出した。

さかのぼること前日の深夜

「呼び出してすまない」

「別にかまわねえが、お前が呼び出すことなんか初めてじゃねえか」

とある横浜内の倉庫にて、二人の男が向き合っていた。

「ああ、ちよつとトラブルがあつてな。そつちにも知らせとこうと思つて。来てくれて助かつたよ。中原」

さすがにバーボンに直接話すわけにはいかなくてな。そう語るのは黒の組織に潜入しているはずの男赤井だった。

「何があつた。やばそうなのは感じてるんだが。」

「実はな……」

赤井から聞いた話は衝撃的だった。

今から1週間後ジンと取引任務を受けることになっている。それに乗じて捕まえる計画が上層部から伝えられたんだが、

取引相手が誰なのか、何を取引するのかもわかんないまま突っ込むことになってし

まっている。

しかもこちら側の人員も一応知っている人間もいるが顔も名前もわからない人も大勢参加することになっている。

「……………はつきり言ってそんな計画成功するわけないだろ」

「ああ、私もそう思う。おそらく今回の件で自分の正体は露呈するだろう。もちろん死んでやる気はないが、組織にはいられない。」

「お前の恋人は宮野夫妻の娘さんだったよな。どうするんだ。このままじゃ彼女も……………」

「正直元・なんだがな。あいつは妹を残して自分だけ逃げようとはしないだろう。」

そこで頼みがある。

「元恋人として、親類としてあの姉妹を死なせたくない。頼めるか……………」

「……………というわけなんだが」

話が終われば空気が重い。

諸伏は頭抱えてしまっていた。

「ジンの話が出てきていたけど聞く限り大丈夫なのか？」

「死なずに脱出することも危険だろうし」

「ま、できなくはないけどね」

あつけらかんという太宰を一斉に見る。

「といつても、これをするのは翼なんだけどね……」

「自分の魔法は姿を見せなくても離れていてもできるから」

「ああ……なるほど」

「といつても今回俺たちがするのはあくまで取引がうまくいかないようにすること、そしてあわよくば幹部クラスは無理だとしても下っ端レベルを捕縛すること。」

そこまで聞いて何やら考え込んでいた松田は

「……なあそれ俺らは何かやることあるか？」

「っ!!松田!?!」

「ああ確かに俺も魔法使えるようになってきたもんね。最近は翼くんにも習っているし」

「萩原までっ!!危険なんだぞ!!」

「落ち着けよ諸伏。さつき太宰も言つてたじゃねえか。姿を認識できないようにかなり

離れた所から能力を使うって。だよな？」

「そうですね。そもそも私たちも今後も危険な目にあう可能性があるようなことは排除しています。こちらから手を出す場合は絶対に姿を認識させないことを前提にした場合のみ。」

「あきらめろ諸伏。俺らだってお前らに協力するといった段階で危険は承知しているんだぜ？」

「伊達まで……」

「おお？ということは伊達も参戦か？」

「ああ、といっても俺は邪魔係ではなさそうだがな」

そういつて伊達は太宰を見る

「ええ、伊達さんにはこちらが邪魔した後の騒ぎを聞きつけ駆けつける役です。」

「ま、妥当なところだな。いきなり公安は動かないから第一次は刑事部だろうし」

「俺ら爆弾処理班は爆弾なきや動かない部署だし」

「じゃあ当日の位置取りも含めていろいろ詰めようか……」

当日、取引が行われる倉庫から若干離れた所に邪魔者集団が陣取っていた。

「そーいや、結局降谷はなんか言ってたのか？」

「諸伏を通じて、容赦はするな、どんどんやれと」

「降谷さんらしいですね」

「あいつは諸伏見たく危険だなんだでしり込みしないやつだ。むしろ一度吹っ切れれば使えるものは何でも使うタイプだからな」

「というか、あいつ俺らが邪魔するだけって知ってるのか」

「刑事が人体に攻撃しちやまずいでしょ」

後日このことを知った降谷は初めこそ大事な明美を危険にさらしやがってと怒りを見せてはいたが経緯を知って立場は違えど組織に属するもの同士上のいうことは絶対というのはわかっていたためそれ以上は何も言わなかった。

「にしても諸伏も心配性だよな。スカラを2度かけするなんて」

「この場にこれない分余計に心配しているんですよ。あと、いけなくてもサポートぐら
いはしたいとも思いますし」

谷崎は苦笑いで答える。

諸伏はこの場にはいない。いくら警察内部の掃除が終わったとしてもさすがに黒の
組織が大勢陣取る場所に連れてくることはできないのだ。

今この場にいるのは谷崎、翼、萩原、松田の4人だ。ちなみに今は念には念をと谷崎
の“細雪”に隠れている。

「………赤井さんから連絡来たよ。やっぱり失敗だつて」

「了解。【イオ】」

「んじゃ俺も、【凍える吹雪】」

「【大地の怒り】」

倉庫内は大騒ぎである。いたるところから爆発音、季節外れの吹雪、倉庫内のみので
震、時折突風が吹き荒れ炎を巻き上げ竜巻が起こり、豪雨も起こっていた。ちなみに豪
雨は別地点で念のための治療班として待機していた麻生の仕業である。

この大騒ぎに予定通り伊達班、そして目暮班が駆け付けて収束を図る。その際どきくさにまぎれ伊達も雷を落としたのは余談だ。

護送車を安全地帯だと思ったのか自ら乗り込むものもあらわれ予定人数より大幅に捕縛できたのはうれしい誤算である。ジンはウォツカに先導され何とか脱出した。その姿を望遠鏡を使い見つけた松田が火の粉を頭に落としてアフロヘアにしたのも余談である（ちやつかり翼が写真に収めていた）

「赤井も無事に脱出できたそうだな」

「それは邪魔したかいがあったな」

「赤井さんが入手したデータの詳細です。」

.....

全員確認し一斉に黙り込む。それと同時にFBIの上が強引な作戦に出た理由も判明した。そのデータ内には大物のスキャンダル並びに自分たちの悪事も入っていたからだ。しかもその中に入っていた悪事は何もFBIのものだけではなかった。

「.....こりや必死になるわけだ」

「FBIにCIAにMIC6? うわっあると思つてたけど日本警察のもあるじゃん。」

当然ながら日本のものもあつたそれも上から下まであらゆる悪事が収められていたのだ。

「とりあえずFBI分は赤井さんにデータ送つときます。」

「それがいい。他の海外組織のは組合経由で送つところ。フィッツジェランドに連絡して」

「了解です。」

「うちのはどうする? 悪い奴に消されちゃたまらんでしょう」

「いくつかバックアップとっておきましょう。一つは警察に一つは異能特務課、そしてここ、DMOで最後は翼のアーカイブの中だ。万が一3つ消されたとしてもアーカイブの中は消しようがないですからね」

「ふい〜〜さすが何でもありだね」

終息にあつた刑事部だがやはりというか頃合いを見計らつて公安部が事件を根こそぎかつさらつていった。しかし、予想以上に捕縛した人数が多かつた点、事件を知る伊達がいるとしても目暮のもと想像以上に事件の収束が迅速だつた点からかなりの報償が与えられた。これは種田長官の案だがこれを受け入れるあたり公安も歩み寄ろう

としているのかもしれない。

設定2

萩原研二・・・無属性、氷メイン

- ・凍える吹雪：広範囲に吹雪を吹き荒れさせる。
- ・ヒヤド：敵単体を氷の矢で攻撃し凍結させる呪文。
- ・ヒヤダルコ：吹雪を起こして敵複数を氷漬けにする上級呪文。
- ・ヒヤダイン：ヒヤダルコを上回る威力の猛吹雪で 敵全体を攻撃する
- ・マヒヤド：巨大な氷柱で敵を貫いてを攻撃する呪文

松田陣平・・・無属性、炎メイン

- ・イオ：空気中の粒子を操り爆発を起こし敵全体に小ダメージを与える技
- ・イオラ：イオより強力な爆発で 敵全体に中ダメージ与える技
- ・イオナズン：並の敵なら跡形も残らないほどの 強力な爆発を起こし敵全体に大ダメージを与える技

- ・ギラ：閃光を伴う帯状の熱エネルギーで敵を攻撃する呪文。
- ・メラミ：燃えさかる火球を敵1体にぶつけてる技
- ・メラゾーマ：敵1体を地獄の業火で敵を包んで焼き尽くす技

伊達航・・・無属性、雷メイン

- ・稲妻：あたりから雷雲を呼び集め、その場のすべての敵 めがけ、稲妻を落とす。
- ・ギガデイン：敵全員に天空の雷を落とす。
- ・ライデイン：雷雲を呼び稲妻で敵を攻撃する。

諸伏景光・・・無属性、サポートメイン

- ・スカラ：味方1人を光で包み、防御力をかなり上昇させる。
- ・スクルト：仲間全員を光で包み、守備力を一度に上昇させる。
- ・バイキルト：仲間ひとりの攻撃力を2倍に上げる
- ・ピオラ：味方1人を不思議な光で包み、素早さを上昇させる。
- ・ピオリム：不思議な光で、味方全員の素早さを上昇させる。
- ・ホイミ：一番基本的な回復魔法で単体に効果がある。
- ・ベホマ：単体のHPを全快させることが出来る魔法。
- ・ベホマラー：パーティー全体のHPをある程度回復させる魔法。
- ・ベホマズン：パーティー全体のHPを全快させる魔法。
- ・マヌーサ：あやしい霧で敵の視界を惑わし、攻撃を当たりにくくする。

麻生成実・・・無属性、水メイン

・コーラルレイン：水流で砕け散ったサンゴの無数の欠片が激しく敵に降り注ぐ全体攻撃呪文。

・ハリケーン：ハリケーンを自発的に起こす技

・メイルストロム：地下水脈を地上に押し上げその水流で巨大な渦を発生させる。その強大な水圧で敵にダメージを与える呪文。

・津波：海の精霊の力を借りて、大津波を引き寄せ、敵に水圧 によるダメージを与える。

・ホイミ： 一番基本的な回復魔法で単体に効果がある。

・ベホマ： 単体のHPを全快させることが出来る魔法。

- ・ベホマラー：パーティー全体のHPをある程度回復させる魔法。
- ・ベホマズン：パーティー全体のHPを全快させる魔法。

第11話 明智五郎編

横浜湘南海岸

太宰がいつものように自殺に慎み、国木田がそれを連れ戻しに来た時のことだった。

浜辺に打ち上げられた人らしき物体を目にしたのは。

「お、おい！大丈夫か!？」

国木田が声をかけるも起きる気配はない。

息はしているようだが、衰弱が激しい。少しでも遅れると手遅れになりかけない。

その様子を太宰にしては険しそうな表情をした。

「（こいつはつい最近まで騒がれた、探偵王子？でもなぜここに？それこの衰弱の仕方。

いやそれより……）国木田君!! ゆっくりだけ早く抱えて今から事務所に行こう

!! 今日とは与謝野君は？」

「今日は、非番だったはずだが……」

「仕方がない……急患だ。休みのところ悪いが出勤してもらおう。それと、念のため
外先生にも来てもらおう」

いつになく真剣な表情の太宰は出社の胸を与謝野に伝え急患診察準備の指示を出しているのを横目に見ながら、自身の車へ急ぐのだった。

診察中のランプが消え与謝野と鷗外が出てくる。

「どうでした?」

「外傷がない上にそれでも着々と近づく死の音。かなり大変だったけど、何とか死ぬことはないだろう。」

「ただ、いつ意識が戻るかはわからない。」

「そうか……」

ううむ、国木田がうなる。

「とにかく、会議室に戻りましょう。」

会議室には今回の件で非番の幹部を含めて全員を集めた。

「ええ……今回俺たちは……」

「ことのあらましを説明する。」

「……というわけで、命に別状はなくなつたがいつ意識が戻るかどうか分からない。」

……

全員が沈黙する。

「……そもそも、あいつが誰なのかさえ分かっていない状況だ……目覚めるほかない。」

「!!(そうか俺の異能が認知を打ち消したんだ。それは幸いだつたな。)」

口々にそうだなというメンバー。そして自室や仕事に戻っていく。

「……」

「どうしたんだい。敦君。」

「……いえ、あの人のことどこかで見たような気がして……」

「敦君もかい？実は俺もなんだよ。」

なんかもややもやしている気がして……

「!!（そうか……すべてが忘れるわけじゃない……）」

近くで珍しく真剣な表情をしている乱歩を見た。

「……乱歩さん」

「太宰は、あいつのこと知ってる。……靄が晴れないんだ。こんなにもややもやしたの初めてでね」

珍しく弱気な発言だ。

「ええ……少なくとも異能のおかげで他のメンバーよりは覚えていることも多いと思います」

それでも本人から本当の真実を聞かなければ彼が何者なのかわからないとは思いますが。

「そう……なら今回の件は完全に君に任せるよ。その代わり完全に解明しなきゃ承知

しないから」

このもやもや感がなんか気持ち悪いんだよね。

「(乱歩さんにとってはそうだろうな) 当然です。しっかりと解明して見せますよ」

乱歩と一通り今後について話し合った後、すでに自室に戻ったであろう男の部屋の前に行く。

「翼くんちよつといいかい?」

「……なに」

「いくつか調べてほしいことがある。【認知科学】【心の怪盗団】【探偵王子】この3つについて調べてほしい。」

「……それって今霞がかかったように頭の中がなっているのとなんか関係あんの?」

「!! やつぱり。翼君もか……」

「うん。……俺たち情報のエキスパートにとっては屈辱。」

「とにかく頼むよ。」

「わかった。」

「これは少し」本気「ならないといけないな。」

そうつぶやきさつそく異能の一つ古代書(アーカイブ)で調べ始めた。

「乱歩さんの真剣な表情だけでなく、翼の本気モードも見ることができるとはな

扉を閉め、未だ目覚める気配のない青年に思いをはせる。

「君の存在が私たちDMOの主力を本気にさせたみたいだよ」

「………これ」

太宰は翼に唐突に招かれたと思ったたら、大量の紙束を渡された。

「前に言ってたやつ………2週間かかったけど」

「こんなにな？さすが翼に頼んどいて正解だったよ！」

「1つの件に2週間かかったの初めてだった。正直古代書（アーカイブ）じゃなかったら詰んでたね。よくもまあ大衆の人の認知を変えるだけでここまで生きてた人の記憶すらなくすんだから。あらゆる組織の一つの手がかりを辿ってようやくたどり着いたんだ。無駄にはしないでよね」

「ああ………もちろん。彼のしでかしたことはこのご時世では許されないことだけど彼

自身が今どう思ってるのか……その答え次第で彼の今後の人生が決まってくる。その時は翼にも協力してもらえるかい？」

「うん。了解、それに自分自身彼とは話し合いそうな気がするんだ。同い年だし。」

さすがに芥川とはあまり相性良くないから……

「ではこれは乱歩さんや社長たちにも報告してくる。それに今回は彼らにも協力して仰ぐことになりそうだ」

「彼ら……あの人たち」

「そう、昔、私が武装探偵社員にマフィアからなれたのか。そのきっかけをくれた人たちにね。」

それから、この情報をもとに認知とは何かの学問を究めながらどの事件が誰が起こし、心の怪盗団の正体はなんなのか。最終的な黒幕は誰だったのか。

理解不能な人もいたが何とかコンコンと説明し全員が理解をするに至った期間、約3か月。

ようやく彼が目覚めることになる。

「んう」

名前も知らない彼、いや太宰がいうには「明智吾郎」というちよつとした名の知れた人らしいが、その彼がD M O 医務室に運び込まれて2か月

ようやく目覚めたのである。

その時間、ちょうど医者として他のカルテを確認していた時だった目覚めた彼が動きうつすらと瞼を空けたのを確認した。

暗い、暗い奥底にいた自分が何かに引つ張りあげられるように意識が浮上していくのを感じる。

彼、明智吾郎がうつすらと瞼を開けると、暗かった場所とは正反対の真つ白い部屋だった。

光に慣れ、少ししか動かせないがあたりを見渡すとピツピツピツとおそらく自身の心臓の音を示す機械。腕には点滴がながっていることが確認できる。そこでようやく自身が生きているんだと感じた。

どうしてだろう。あの時僕は確かに認知上の“僕”と銃撃になってそれで……

「ようやくのお目覚めね。」

なぜ生きているのか、そのことばかり考えていた僕は同じ部屋にもう一人いることに全く気づかなかった。

「気分はどうかしら？」

「あっ!!」

「ああ、しゃべれなくても無理はない。3か月ぶりの目覚めだからな。」

何か返事をしなければと声を出そうとしたがかすれて出てこない。戸惑っていた僕に女の人（白衣を着ているから医者だろうか）は2か月もの間眠っていたのだから仕方がないといっていた。

そのことに驚いた僕はそばにかかっていたカレンダーに目を向けると翌年の2月となっていた。

「お前が起きたことをほかの皆にも伝えなければな。」

では、少し席を外すからこのまま休んでいてくれ。

素晴らしい席を女の人は席を外した。

明智はあの後のことを整理した。現実とは違うパレスの中、獅童パレスにて「心の怪

盗団」と相對した。相手は人に恵まれて生きてきたまるで自分とは違う生き方をしてきた少年雨宮蓮“ジョーカー”。なぜ、こんなにも自分とは違うのかと恨み、憎しみを持って究極奥義ともいえるペルソナを暴走させてまで殺そうとした。でも敗北した。一度は「心の怪盗団」の一員になったけどそれを裏切り、支えてくれた冴さんを裏切り、挙句の果てに一時期仲間だった「心の怪盗団」のメンバーである佐倉双葉と奥村春の肉親を殺した張本人。

敗北した僕を、罵倒するのかと思つたが、ジョーカーは一緒にやり直そうとまで言つてくれた。

結局は認知の僕がみんなを殺そうとしたから、逃がすために僕が残つただけだけど最後の最後までジョーカーだけでなく他のみんなも一緒に逃げようと叫んでいたのは覚えてる。

あれから、獅童はどうなったのだろうか。3か月もたっているのだからどちらにせよすべてが終わっているはずだ。

しばらく考え事をしていたが、あれから結構立っているような気がする。10分という時間ではないだろう。気を使つてくれたのだろうか。

試しに声を出してみる。まだ掠れはするものさつきよりは声が出ていた。これな

らば話すことができそうだ。

頃合いを見計らったのかのように出ていった女医が数人を連れて戻ってきた。

年は少しくらい年上だろうか。

自分と同じくらいの少年もいるようだった。

声が出ないことを聞いたからか、筆談でも構わないといってくれたがそれは大丈夫とお断りをした、というかそのためにのスケッチブックだったのか。

「まずは、回復おめでとう、目覚めるのをずっと待ってたよ。明智吾郎君」

茶色のコートを着た少しくらい年上ぐらいだろうか。なぜか僕の名前を知っている？自分はパレスで一度撃たれている。あれからどうなったのか知らないが大衆からの認知はなくなったはずだ。

混乱をしているのが伝わったのかまず最初から説明を始めてくれた。

「ああ、君の名前を知っているのはフェアじゃないな……こちらの名前も明かさなければな」

「……はあ、お前は一々回りくどいねえさつきと名前言えばいいじゃないか。あたしは与謝野晶子、一番最初にあったからわかる通りここの医務担当だ。」

やはり、医者だったようだ。

「そして、こちらは江戸川乱歩。うちの事務所を支える探偵だ。」

「……………」

こちらを見定めるように真剣な表情で自分を見つめてくる。

探偵？というところはここは探偵事務所なのか。自身（探偵だったがそれは自分で起こした事件を解決していただけ）と違って優秀なんだろうか。

「……やはりすぐに結び付けてしまう。」

「で、こつちが徳島翼。まだ未成年の18歳だ。情報収集担当でうちに来た依頼の大半は翼が集めた情報をもとに解決してきた」

「よろしく……………」

18歳ということは同い年なのか。そして、情報収集ということは双葉と同じということになる。

「最後に私、太宰治だ。よろしく」

他にも主力メンバーはいるが医務室に押し掛けるわけにもいかない。ちょうど依頼で出ているメンバーもいるしおおい知ってほしい。

「さつそく本題に入ろう……………勝手ながら君のことは調べさせてもらったよ。」

一言一句聞き洩らさないように話を聞いた。

まずはここがどこなのか。横浜にある総合探偵事務所DMO (Detective Management Office) という異能力者が経営しているところらしく。

太宰さんとここにはいないもう一人が湘南の浜辺で衰弱して倒れていた僕を発見したとおいうことだった。外傷は特になかったとのことだったが、おそらくそれは現実世界ではなくパレス内で撃たれたからだと思つた。

そして、大衆認知のことだが、やはりテレビでも名前は出てこないし実際DMO社員も僕の顔を見てすぐに誰かわかつたものはいなかつたそうだ（太宰さんを除き）。なぜ太宰さんだけがハッキリと覚えていたのかは太宰さんの異能力が関係するみたい。

そして、獅童がどうなつたのか、「心の怪盗団」がどうなつたのかも教えてくれた。

結局獅童は改心させられ、罪を告白し現在は監獄にいるらしい。そのことについてはジョーカーは約束を守ってくれた。それだけなのにひどくスツキリとした。

それから、「心の怪盗団」の現在についても知らべてくれていた。獅童を改心させても大衆は獅童のことを信じ精神障害だった、そんなの何かの陰謀にはめられただの好き放題言つており最後の手段として大衆を改心させることを決心させることにしたそうだ。そうして、全てが解決してもパレスでの改心方法なんて証拠があるわけではない。そこでリーダーである少年が出頭し、少年院に入ったそうだ。

そのことにひどく動揺した。いや、自分が寝ている間にいろいろなことが一気に起こつていて頭がついていけないのかもしれない。

「……すまないね。今日起きたばかりだというのに。今日はここまでにするかい？」

太宰さんが気を利かせたのかここで話をいったん止めようとする。しかし、聞いておきたいしどうなったのかすべてを聞きたいと思った。

「いえ、大丈夫です。話を続けてください。」

「これ・・・ハーブティー。落居着くと思うから」

「え？あ、ありがとう」

徳島君がいつの間にか持っていたハーブティーをカップに入れて差し出してきた。

いい香りがする。

一口飲むだけでいぶ落ち着いてきた。

「じゃあ続きを話すよ・・・」

少年院に入ったリーダーだったけど彼らの仲間たちは何とか、署名や学校として抗議する体制を作っていた。そして、最終的に保護観察処分となっていた免罪事件の時の女性を説得し、証言に立つてもらうことに成功してリーダーは釈放。それが2月13日のことだった。

「・・・以上がことの結末だ。」

ちなみにだが、あり得ないぐらいパレスのことや【心の怪盗団】のこと。警察内部の動きまで事細かに調べてあったがすべて徳島君の功績なんだとか。

敵にすると厄介な人物だとそう感じた。

「さて、君のことも調べさせてもらったよ。鴨志田事件よりも前の精神暴走事件、廃人化の実行犯。」

ついに来たか。

「……すべて調べたとおりです。自分は認められなかった。獅童に付き従うふりをしながら最終的には自分が獅童の息子だといって絶望を植え付ける。それが自分の計画だった。他の人はどうなろうと関係なかった。だからッ」

奥村春と佐倉双葉のことが頭をよぎり言葉が詰まる。彼女らは完全な被害者なのだ。闇の中にすぎた自分とは違う。

「でも、今はそうじゃないだろうか？君にもほんのひとときでも怪盗団として活動している形跡があるね。それと、特にジョーカー、いや雨宮くんとは親しかった。」

そういうわれルブランでのひとときや吉祥寺でビリヤードを行った時のことを思い出す。

「どう？楽しかったかい？」

「……楽しかった。」

だからこそもつと早く出会っていればと今でも思う。

「……これからどうしたい?」

これまで珍しく一切口を開かず、話を聞いていた乱歩が問いかける。

「え?」

「パレスで相打ちになって死んだと思つたら生きてて、しかも3か月経つて何もかもが解決していて、で、君はどうしたい?」

「ちなみにあの後のことだけで明智君が通つていた高校だけど。探偵なんてやつてなくて一般人の明智吾郎になっていていつの間にか退学したことになっていた。」

せかすようであるいけどさあ。どうしたいの?これから

どうしたいか、もちろん殺してしまつた人はもとに戻らないし廃人化した人をどうやつて元に戻すのかなんてわからない。だけど、社会のためにできることはあるんじゃないか、

「……償いたい。自分のせいで大衆を巻き込み、悲しませた。だつたら、自分たちで社会を新しく作り変えるんだ!!」

「……へえ、言葉にしたら顔色良くなつたじゃん」

乱歩は満足げに笑つた。

「なら……ここに優良企業が目の前にあるんだけど」

……え?

明智は目をパチパチと瞬かせた。

「……太宰、すでにこうするつもりだったな」

「……はあ」

「でもそうなたらいいよね。探偵が増えるわけだし」

「え？え？どういうことですか？」

「君をDMO社に歓迎するよ。」

ちなみに福沢さんと森さんには許可とってるよ！。

あつけらかんに言い放たれた言葉にその場にいた全員が終始無言。

なんと用意周到なことか。

「……福沢さんがOK出したなら、こっちとしても異存はないけど？」

「まあ、太宰さんが言いそうなことだし」

「で、でも、探偵王子なんて呼ばれてましたけど所詮は偽物です。自分で犯罪起こしてあ
たかも解決して見せた、探偵なんて呼ばれるわけには……」

僕は思わずうつむいた。

「社会を新しく作りたい……そういったよね？償いたいとも」

「だったら、ある意味この探偵事務所への就職はいいのかもしれない」

徳島君の言葉に目を丸くした。

「そう、パレス内ではしか改心できない。それは学生だったからであつて社会に出ればその人を解決に導くやり方はいくらでもあるんだ。」

「警察は組織に縛られるからすぐには動けない。悪いことをしている大物との癒着が行われていたりとかね」

獅童がいい例だ。

「だけど、私たち探偵事務所は法に縛られない。逮捕する権利はないけど操作する権限は与えられる。証拠がないから捕まえられないと泣き寝入りをする人も証拠さえ見つかれば捕まえられる」

「それに……君も変わりたいんじゃないの？それとも探偵業は嫌いだった？」

嫌い？そんなはずはない。それでもなければ探偵なんて名乗るはずがない。たとえばそれが都合がよかつたとしても。

ぶんぶん首を振る。

「じゃあさ、なろうよ……本物の探偵に。自分で起こした事件ではなく誰かに起こされた事件を解決するために」

その言葉で決心した。

「よろしくお願いします」

新たな自分に生まれ変わるDMO社員として。

第12話 明智五郎編

そういった話が終わり疲れ始めたのを感じた時与謝野さんが休ませろとその場はお開きとなった。

自分も気が張っていたらしくすぐに医務室のベッドで眠りについた。

次の日は昨日の今日ということで与謝野さん、ともう一人医療の権化で副社長である森鷗外先生が来て軽い問診をしただけだった。(超大物がDMOの副社長だったことに驚愕したが良い人そうだった)。与謝野先生には森先生は腹の中真つ黒だからと教えられたが。まさか目の前でいう者だからこちらが汗ダラダラだった。当の本人は笑っていたが。関係が良好なんだろうとかがえた。

そのさらに次の日から、いろんな人が自己紹介もかねて医務室に見舞い(?)僕からしたらコントをしに来ているのではないかとも思うのだが、おそろくすでに知っているだろうに皆優しいと思う。

ただ、中にはなぜか体を宙に浮かせながらやつてきたり先が鋭い蝕手ほいを出させてみたりかなり個性の強い人たちだったけど。

そして、毎日やってくる人も中にはいる。

「翼は毎日来てるけど仕事の方はしなくていいのかい？」

『してるよ……でも毎日見舞いに来たって戻ってからすればいいし……』

僕は彼のことを翼と呼び始めた。何より同じ年だったし、向こうからも翼と呼んでくれといわれたのでじゃあ吾郎で構わないとお互い名前と呼んでくれている。

『それに……』

？

『となり、工事の音でうるさい。』

「……？ああ、そういえば太宰さん言ってたつけ？僕の部屋、翼の隣になるって」

『……うん。つまり高確率で太宰さんも近くに來るってこと』

そういい、思いつきり翼はため息を吐いた。その姿に苦笑いをしていた。他にも国木田さんや中也さんからは黙って肩をたたかかれたし、相当振り回された人たちなのだろう。

「……で、翼は今何してるの？」

光っているコマンド文字で何かを調べているらしい。

これが異能力の力だ。俺たちはペルソナ覚醒者は異世界でしか力が出せなかったが、

現実にはタイプの違う異能力者が全体の4割を占めるらしい。

話には聞いていたが、あの時は獅童のことで頭がいっぱいだったからそれどころではなかったし途中から怪盗団の話で持ち切りだったからすっかり忘れていた。

翼は数多くいる異能力者の中でもたくさんの種類を持つ多重能力者らしい。(といっても1つの異能から)なり立っているとのことだったが。

「おや、もう始めているね……」

そこに入ってきたのは太宰さんと……

「そこにいる彼が話していた人物ですか……」

眼鏡をかけたいかにもお役所仕事という感じの人物だ。警察関係者だろうか。思えばここに警察関係者が来たことは一度もなかった。認知上僕がやったと思っていないからなのかも知れないが。

「紹介しよう。彼は坂口安吾。警察独立組織、異能特務課所属だ。」

異能特務課といえば警察の中でも独立したい位置におり、しかし、どの部署よりも地位が上の部署である。公安の人と話したときもそう話していたし、冴さんの話に出ることもあった。

「よろしくお願ひします。」

話を聞いてみればどんな人かと思いましたが、なかなか礼儀正しい人じゃないです

か。

あなたとは大違いだ。

いきなり太宰さんにそう話した坂口さん。

仲があまり良くないのだろうか。

『昔からああだよ。あの二人』

“昔”というのは前世という者らしい。ここに所属している異能力者、無能力者も何人かがこの世界に転生をしているらしい。

一応翼から前世がある人の名簿を渡された。僕自身のでかしたことを知っている人たちらしい。そして、前世でもっとたくさんの人を殺してきた人たちがおおぜいた。現在まだ12歳という泉鏡花ちゃんも35人殺したというのだから、僕が事件を起こしたことも嫌味を言う人は1人もいなかった。

「そうそう、彼に來てもらったのはね……」

どうやら坂口さんが所属する、異能特務課に記憶を封じる能力者が所属しているらしい。今はただの明智吾郎ということにはなっているけど、いつ何かの拍子で思いだすかもしれない。現にDMOのメンバーは異能力無効化の太宰を除き、どっかで見たような感じがする。と違和感を覚えたそうだ。

だったら、ただの明智吾郎もないことになってしまうとのことである。つまりは、知

り合いが誰もいない状態になるということらしい。

「これはDMOと君を守る手段でもある。」

すでにその能力者には了承はとってるからあとは君の了解だけだ。

その能力は対象は全員に対するのだろうか？

そう思ったらつい口に出していた。

「祖の能力つて選んだ対象者を除くことつてできますか。」

「ああ……それはできるが」

「なるほど……翼」

『今出してる……』

ほどなくして、一枚の紙を自分に差し出してきた。

そこには「心の怪盗団」だったメンバーと明智と縁があり少なくとも明智が実行犯だということを知っているであろう人々の顔写真。そこには冴さんやルブランのマスターの写真もある。

『吾郎、確認して。ここに人以外でも自分の名前を憶えてほしい人がいるから教えてすぐに最新版を作る』

そういきついた翼は頼もしかった。

その一覧を改めて確認する。

一通り眺めてそれを坂口さんに渡す。

「これで、お願ひします。」

横から見ていた太宰さんが「これ、君がいた高校の人いないけどいいの？仲良かった友達とかは？」

「いえ、元々探偵王子と呼ばれていた時から腫物を扱うようにされてきましたからそれは大丈夫です。あと一つ、さっきのところは獅童正義も付け加えてもらえませんか？」

「いいのかい。君が長年苦しんで生きた相手なんだろう？」

「それも含めて、ここで自分の人生を歩んでいきたいです。それに彼が自分のこと覚えてなくて急に息子などいないといいでしたらそれこそ違和感だらけじゃないですか。それに……自分だけ覚えてるのに相手が……長年恨んできた相手が何も覚えていなかったら悔しいじゃないですか」

晴れ晴れとした雰囲気ですういきました。

獅童と坂口はメモを取り、

『獅童もいれて更新しとく？』

「いや、獅童の名前も顔も有名だからな。それに場所だつてわかる。メモで十分だ。」

「じゃあ祖のメンバー以外を頼む」

「分かりましたよ。伝えておきます。」

素晴らしい坂口さんと太宰さんはすぐに出ていった。

『さて、少し邪魔が入っちゃったかな』

調べ物を再開する翼。いったい何を……

『吾郎が廃人化させた人たちの回復、誰が現在は精神崩壊で入院しているのか調べてる』
「つでけるのか!？」

思わず喰い気味できいてしまった。自分がここで生きると決めてから起こしたことに対して何の償いもしなくていいのかとおもって。

『吾郎なら、心のどこかで思っていたんじゃないかな?このままの状態でもいいのかと。だから、吾郎の償いを手伝うことにした。スッキリした状態で社員になってほしいからね』

そういう翼の言葉に柄にもなく涙があふれそうになった。

『よし、これでオケー。都内だけだよね。』

「ああ、さすがにその後転院して県外に行かれてたらどうしようもないけど」

『……ちなみに精神崩壊させた相手の顔とか覚えてるよね。』

「もちろん!」

『なら、ここからは吾郎の出番だ！今、都内の精神科病棟のある患者を調べた。一人ずつ顔写真出すからターゲットが出たら教えて。』

ちなみに都内全部だから相当な人数がいる。覚悟して。

そういわれた明智だが、もちろん自分ができることがそれくらいならどんなに過酷な道でも構わないと決意を固めた。

果てのない罪との向き合いが始まった。

人数や顔は把握していたけれども精神障害で入院してる人数の多さに絶望しかけるも周りの励ましや他のDMOのメンバーが自分の任務の合間に手伝ってくれたこともあって徐々に判断することができた。

被害者だと判明すればあとは翼の出番らしい。

『∞魔法（シンクロノイズ）』

「今のは∞魔法の一つ（シンクロノイズ）対象者の心に直接語り掛ける能力だ」

『死んでいないのならば、心のどこかに本人がいておびえている状態。だから直接怯えを取り除く』

「一応今日は一人、今谷崎がその人がある病室を見張ってる。失敗はしないけど念のため」

素晴らしいお開きになった。

そして次の日、

「谷崎から連絡あった。無事目覚めたらしい。今検査したりカウンセリングを受けたりしているらしいが、特に後遺症などはないそうだ。」

国木田さんからの報告に僕は安堵した。

『安心するのはまだ早い。たった一人だからね・・・さつさと全員終わらせよう』

「おう・・・って言ったけど。能力使うのって結構疲れるんだろう？焦らなくていいから自分が言うのもなんだけど。そう付け加えて。

『心配してくれてるの？ありがとう。でも大丈夫。』

そんなやり取りを見ていた太宰はうんうんと頷いて

「二人は言いコンビになりそうだね!!」

「?」

「おい、まさか・・・」

国木田は嫌な予感がした。

「よし、これが解決した暁には翼を教育係に任命しよう。」

もちろん私たちも協力するさ。

「おい、それって翼だけに負担かからねえか？」

俺たちのサポートもしてんだぞ。

「そうだね……だから、翼に頼まないでいい情報は自分で見つけよう!!」

「…… お前が言うな!!」

即座に突っ込まれていた。

「おい、無理しなくていいんだぞ?」

『大丈夫……吾郎と協力するの楽しそうだし、そもそも俺の部屋の隣に吾郎の隣に部屋を作ったのだからこのためなんだろうし』

ああ……と国木田も遠い目をする。

そういえばその指示出していたのって太宰だったか……

つまりは確信犯だった。

『まあ……でことでもこれからもよろしく!!』

「おお、なんだかよく分からなかったけど」

『でことで残りの作業も終わらせよう。』

こうして、仕分け作業と廃人化の回復をすべて終わらせたのが10日間。

ようやくすべて終わったのだった。

東都では連日精神暴走事件及び廃人化になっていた人々が次々に回復していたの

だった。急な回復だったため湊では様々な憶測が飛び交っている。怪盗団が何かしたのではないかということもテレビでは放送されていた。それでも、家族が涙を流し喜んでいる映像も写っていた。明智もその映像を見ながら颯爽だれがやったとか関係なくほんとはよかつたと思つた。

「終わつたんだな……」

『ああ、これで一連の事件は解決だ!!』

「ああ……自分だけじゃこんな笑顔見れなかつた。本当にありがとうございました!!」
僕は全員に頭をさげた。この人たちに出会っていなくなつたら今の自分はいないし、人を信じることもできなかつただろう。

「頭は下げなくていいんだよ。明智君が心の底から助けたいと思つたからこそ実現したんだ。それに……私たちは仲間だろう……ですよね福沢さん」

「……明智吾郎をDMO社員と認める。これから精進したまえ」

「……へ?」

「あー昔武装探偵社時代の名残なんだ。たまに新しく入るメンバーにこのように入社試験をするの」

「DMO社は探偵社だ。まあ私はスカウトしたからあれだけど元々君はこの事件の実行犯。どうするのかわで二分してな、昔と同じように試験をしようということになった。」

といつても特にこちらで何をさせようともせず自分でやりたいことを見つけてさらに翼がツ自ら協力したこと、莫大なあの資料を読む力根気良さ。さすがは腐つても探偵だね。ちなみに合格にしようといったの乱歩さんだから。この社一番の探偵である乱歩さん自ら認めただ。これが何よりの決め手だ。おめでとう」

そういつて他のみんなは出ていつて部屋には医務室には僕と乱歩さんの2人。

「あ、あの……」

なんて声をかければいいのか、迷っているとき乱歩さんのほうから声をかけてきた。

「俺は探偵であることを何よりも誇りに思ってる。だから、真実を知ったとき正直にいつて探偵失格だし探偵と名乗る資格はないと思つたよ。」

それはそうだろう。少ししかここにはいないけどほかの人たちから乱歩さんがどれだけすごいのか聞かされてきた。

「でも、必死に情報をもとに探している姿は調査をしている時の俺に似ていた。だから、こういう覚悟をもつてできるんだと思つたら手をさし伸ばしたくなつたよ。これから、僕をがっかりさせないでよね」

最後におめでとうと言つて医務室を出て行つた。

今まで認められない存在なんだと思つてきた自分、だけどこんなにも認められることがうれしいことなんだとこの時の僕は初めて知つた。

次の日から医務室生活を卒業して自分の部屋に移動することになった。3か月の衰えはまだ回復しきっていないけど何とか歩けるようにはなってきた。

そして、初めて会議にも呼ばれるようになり改めてこの組織が何なのかを詳しく知った。

膨大すぎてなつていったらいいのか・・・

まあ依頼は猫などのペット探し（Fクラス）などから犯罪組織摘発（Sクラス）まで幅広いということだった。入社して間もなくまだ、リハビリ途中の自分はリハビリを続けながら翼の情報収集のサポートや事務作業をしながらいろいろな業務を経験することになるだろうとのことだった。

これから、どんなことが待っているのか楽しみで仕方がない。

会議室で入社に際しての話が終わった後、自室に案内された。

そこは正直言ってILDKどころではないくらい広々とした部屋となっていた。

あたりをきよろきよろと見渡す。ペットに洗面所、シャワー室、しつかりカーテンもついている。

それだけではなく一面に物を入れられる本棚が壁一面にどっしりと立っていた。さすがに今はなんも入っていないが。それから暗証番号式金庫もついている。

「ここが今日から仕事場兼自室ということになる」

太宰さんが正面に歩いていく。そこには広々とした作業デスクその上にはパソコンが置かれている。あまり詳しくはない僕から見てもかなりの高性能だと分かった。

「それとパソコンを開くとログイン画面になる。そして、これがIDとPASSWORDだから忘れないでね」

IDとパスワードをもらった。

試しにさっそくログインさせてもらう。

おそらくこれがホームページなのだろう。それと……

「掲示板?」

『うん、依頼掲示板。ここに一般の人が依頼を書き込んで来ることになっている。』

そこには依頼内容が書かれていた。

「ちなみに一般の方とはネットを通してやり取りをする。例えばどの依頼にするのかは我々が判断をする。そして各々で受注したものがほんとに大丈夫なのか。罨じゃないのか、本人の探偵レベル的に大丈夫なのかを最終判断するのが翼だ。そこでOKとの判断下ればよいよ調査開始となる」

『このシステムも自分が作った。一応そういうった怪しいものは事前に弾き飛ばされるように設定してるけど念には念を入れて。』

「……翼って何者？」

「ただのDMO社員」

「ただの人なら多重能力者じゃないし。IQ400も持ってないでしょ」

『それならこの人たちみんな規格外。』

「ま、それは言えてるね。」

頭の回転が違うと思ったがそれなら納得だ。佐倉双葉よりもすごいのではないかと思っただ。

「話続けると一般人用掲示板の横のメニューを開くとこちらは重要任務用の通達事項となる」

主に全員でかからなければならぬような事件が発生した時用の連絡などが書かれている。こちらには直接事件概要は書かれてなく会議室で直接概要は説明されることになっている。

『とりあえずこの二点は頭に入れておいて、あとDMO用のチャットなんかもあるから部屋に直接行ったりもせず自室からDMO社員と直接連絡取り合うこともできるから此方の活用よろしく』

「あと、明智君のこれからのことなんだけど……」

太宰さんからは坂口さんから能力発動完了したことと、2年間ほど確認のため雲隠れしてほしいとのことだった。太宰さんも昔マフィアから武装探偵社に入るために同じことをしたそうだ。

「まあ、すでに認知上探偵王子という存在は消えていたしさらに能力を上書きした感じだから年のためって言うぐらいだけだね」

あ、別に一步も外に出てはいけないうわけではないよ。探偵になるうえで土地勘を調べるのも大事だしね。一人というわけにはいかないかもしれないけど。

そういう者なのかもしれない。2年というのが長いかわからないけどそのぐらいならと了承した。

『話が決まったところでPCの使い方を教える』

パソコンの使い方、リハビリ、車の免許取得、翼から指定された依頼をこなす日々を過ごしていくことになる

さらに、あることがきっかけで異能力として再びペルソナが覚醒したのだった。

第13話 越水七槻

翼は仕事で四国にやってきていた。今回の同行人は成実である。

突如翼が立ち止まると猛スピードでどこかに走り始めた。話していたはずの成実は翼のあまりの変わりように一瞬フリーズ仕掛けるもすぐに後を追い始めた。

「はあはあ、翼君。どうしたんだ!!」

「こいつつ!!早く治療を!!」

びしょ濡れになっていた翼が抱えていたのはこれまたびしょ濡れになってぐったりしている女性だった。

しかし、脈は小さくなっていながらもまだかろうじて息はあり、すぐにホイミをかけ治療にうつるのだった。

近くの病院を借りての懸命の治療のいかいがあり何とか一命をとりとめ、落ち着いてきたため彼女を横浜の総合医療センターに転院させた。

そして、彼女：寺田紗季の携帯電話から一番連絡を取っていたであろう人物に状況を説明し直接面会することになった。

ガラガラガラ

「あの、連絡をいただいた方ですか？」

「ああ、私共は総合探偵事務所・DMOだ。で、こちらがこの病院の院長を務めている森 鳴外先生だ」

「君が越水さんだね？寺田さんの面会には既に？」

「・・・はい」

「簡単に言うと既に命に別状はない。安定した状態だ。とはいえ一歩発見、応急処置が遅れればどうなっていたかわからない。翼君と成実君に感謝しないといけないねえ。」

それから、発見時の状況などを詳しく説明を終えたのちなぜこんなことが起こったのかの詳細を聞くため一度越水を連れてDMOに戻ることにになった。

「翼。今越水さんお見えになった？」

「あのっ！紗季を助けていただいてありがとうございます。」

「DMOの社員としてやるべきことをやっただけだから。それに成実さんがいなかったら応急処置もできなかったし。」

「挨拶はそこまでにして今回の件なぜ起こったのか心当たりあるのかどうか聞きたいんだが。」

「………実は………」

越水は語った。半年ほど前に起こったラベンダー屋敷で起こった事件を。

それをもとに、寺田が疑われ厳しい尋問がされていたことを。

「なるほどね。翼君、何か情報わかったかい？」

「うん、該当する新聞記事は見つけたよ。だけどなぜか事件ファイルを閲覧しようとしたんだけど見つからないんだけど。」

「なんだよそりや……これは県警も信用できないな。」

「!!そういうえば事件の概要を県警で聞こうとしたら門前払いを食わされた!」

「で、件の高校生探偵は名前も一切明かさずか……未成年だということを盾に取ったな。」

「そんな……確か、どつかの方言を使っていたって紗季が言っていました。」

「なるほど……地方の高校生か」

「なら関西の人は外していいんじゃない? 100%とは言えないけれど紗季さんもさすがに関西弁くらいは聞いたことあると思うけど」

「そっか! 関西弁なら関西の方言とかいう可能性が高い」

「とりあえず一度また現地に行ってみようか。この案件は翼君頼めるかい?」

「もちろん。そのつもり」

「あの!! 私も同行してもいいですか!?!」

「君が?」

「今は探偵を休業中ですけど、真実を知りたいんです!!」

「いいんじゃない?」

「ありがとうございます!!」

そして解散号令がかかる時後から静かに見ていた乱歩が話しかけてきた。

「翼。今回の事件僕は参加しないけど頼んだよ。人を死なせかけた探偵に目にも物見せてやってね。僕は僕で県警への圧力強めてくるから。」

「もちろん、わかっているよ。」

「今のは？」

「江戸川乱歩さん。うちの事務所を支える絶対エース。自分もそれなりに頭が切れるって言われるし他にも優秀な人が多いけど乱歩さんにはかなわない。多分今真相を聞けば100%わかっていんだろうけど越水は自分で真相にたどり着きたいんだろ」

「!!うん!」

「乱歩さんもそれを見抜いたから今回は引いたんだと思う。ホントは一刻も早く解決したいとは思ってる。だって真実によっちゃ探偵を馬鹿にしたようなものだからね」

四国に着き、屋敷に移動する道中服部平次とその幼馴染である遠山一葉に遭遇した。

服部が高校生探偵だと知ると越水の顔が一瞬こわばったが話し方が関西弁だったことから少し落ち着いたようだった。

今回の件を話すと快く協力してくれた。

そして、ラベンダー屋敷に到着しきつそく調査を開始したのだが

「なあ翼さん。確かにトリックはわかったんやけどいくら何でもこんな単純な奴初動で鑑識が見逃すやろか。」

「見逃さないだろうな。ただこれが鑑識たちが捜査終了した後できたものだとしたら？」

「は？まさか!!」

「一度この件は自殺として片づけられているにもかかわらず半年もたって殺人に変わった。そして、このネジのさび具合。明らかに半年前につけられたとしては新しすぎる。越水、一度寺田さんに頼まれて調査をしたといってたな？その時はなかったんだな？」

「ええ」

「その時にはなかったのに、そのあと調査に来たであろう探偵が見つけたそれを証拠として提出した。なんとなく真実も見えてきたな。窓を切り取った後や接着剤等々が使用されるであろう事件性があるものといえば……」

「「空き巣!!」」

越水と服部、和葉までもが一緒に叫ぶ。

「あくまで状況証拠だけだね。ま、こんなラベンダーが咲いた大屋敷なんていかにもお金持ちっぽいしね」

「だから、ここらへんで探偵捜査の基本・聞き込みをしようかと思つてね」

「なるほど、ここら半年で空き巣が発生しとつたら」

「この屋敷にも入つている可能性が高いつてことだね!」

「そういうことだね」

方針が決まり動き出そうとしたところで翼の携帯に乱歩から連絡が入った。

「もしもし?」

「翼、僕のコネと特務課、それからヒロ経由でゼロも協力してくれてそちらの県警に圧力をかけてある。感謝してよね」

「ほんとですか!」

「もうそこまできたら後は君たちならあつという間に解決さ!」

「さすが乱歩さんですね。必ず解決して見せます。」

電話のやり取りをみんなに話す。

「なら、今なら何でも話してもらえらつてことね」

「ほーん、大阪でも噂に聞いた通り江戸川乱歩っちゅうのはすごいんやなあ。親父もよく話してるし」

「うちのお父さんも！」

聞き込みを開始すると同様の手口での空き巣事件が周辺で何件も発生していたことが分かった。

さらに、県警にも直接言ったら顔を青ざめたように興味深いことをペラペラしゃべってくれた。乱歩がどこまでのコネを利用したのかは知らないが相手の表情を見るに相当本気を出したのだろう。翼以外のほか三人は顔を引きつらせていた。服部が思わず「DMO怖っ」といったのを翼は聞き逃さず

「そこ、聞こえてるよ」

「そりやそう思うて。さすがにここまで怖い事務所は初めてだわ」

「この事件は乱歩さんが身を引いてくれたけど、自分にできることは何でもするって言うてくれてね、かなり本気だ。ま、理由はわかるけど」

「そやな、ドアホウがどこのだれか知らんが碌な裏付けもせんとひと一人死なせかけたわけやしな同じ高校生として俺の気もすまへんわ。」

「せやなあ。翼さんと成実さんという御医者さんがその場おらへんかったら最悪なことになってたかもしれへんのやろ？」

和葉は越水を心配そうに見ながら言う

「和葉ちゃん、ありがとね。私も紗季が死んでたら復讐とか考えてたかもしれないけど。翼や成実さんのおかげで助かったことで、もちろん許せないけど真実を明らかにすることだけを考える。」

「そうだな。それと病院からも連絡があつて寺田さんも意識を取り戻して既に意思疎通できるそうだ。これからは治療と並行してカウンセラーを導入して精神回復にも努めていくそうだ。」

「そっか、よかった。翼お願いがあるんだけどさ……」

「さて、ここからが重要な場面だ。まず、その清掃員に装った空き巣常習犯の奴の足取りを追う。」

できれば現行犯で取り押さえるのが楽なんだけどなあ。翼はそうぼやきながらも戦参謀のような顔つきに代わるのだった。

常習犯：槌尾広生は案外早く見つけることができた。ちよほど空き巣から出てきたと

ころを鉢合わせしたからだ。往生際の悪い槌尾は清掃業者装ったワゴン車で逃走を図ろうとしたがそれを許さないのがDMOだった。既に県警の規制が張られていたのだった。話を聞くに乱歩から場所と時間指定で規制を張れとの指示が本庁経由で送られてきたのだった。翼はさすがに乱歩さんと感心する一方、他三人は顔を引きつらせ服部は「やつぱDMO怖っ」と言っていた。デジャブである。

捕まえた後、屋敷の使用人に事の端末を伝え真相を聞きに行った。どうやらその使用人：甲谷廉三は娘さんが自殺だとわかっていたようで、自殺を汚名だと考え、彼女の名誉のために言わなかったらしい。

そして、そのことは全国ニュースになって報道された。そして、寺田の名誉回復もされ、意見落着いた。

余談だが今向こう側ではちよつとした騒ぎが起こっている。当然ながら寺田が犯人ではなかったことで無実だった人間を死なせかけるほど厳しい尋問をした県警とこの馬の骨かもわからない高校生の言葉をうのみにしたマスコミに対する世間の眼は相当風当たりが厳しく猛烈なバッシングを浴びている。更にその高校生は既に顔が割れていたりするため週刊誌では目線入りで写真が載っているものもあり今フリーライターに追われているらしいが翼や他のDMO職員には関係がなかった。

服部と和葉はそのあとすぐに分かれたがある意味四国旅行を台無しにしてしまった負い目から横浜旅行をプレゼントした。後日横浜に来てくれた服部達には最後にDMOにも招待した。

そして、越水はというと

「本日付けでDMO調査員になりました。越水七槻です。よろしくお願いします。」

四国で言っていたお願いというのはDMOでまた探偵として学びたいというものだった。そして四国での推理や奮闘を見ていた翼が推薦をし入社したのだった。これからは大学に在学しながら調査員として働くことになる。

さらに少し後、寺田紗季も住み込み家政婦としてお屋敷のメイドを辞め働くことが決まったのだった。

第14話 元怪盗団との再開篇

（真サイド）

シャドウとの最終決戦から二年が経とうとしていた、ペルソナの力も一切失い普通の日常に戻った。

あれからみんながどうしていたのか話していこうと思う。

まずは竜二。竜二はシャドウとの戦いの最中に渋谷のトレーニングジムで少しでも陸上部時代の走りに戻そうとしていたみたいで、そこで出会ったスポーツインストラクターにあつてどのようにストレッチしたらいいのかマツサージや無理ないメニュー等かなりのことを親身になって教わつてみたい、だから目標を誰かが同じようにけがをしたときに前と同じように走れるようにサポートしたいとスポーツトレーナーを目指し始めた。苦手な勉強も何とか頑張り行きたいスポーツ科学科がある第一志望に合格、今はスポーツジムでアルバイトしながら大学で学んでるみたい。

次に杏。彼女は前々から言っていたトップモデルになりたいという夢を叶えるべく、単身で短期留学をして美容やファッションの勉強をして、ジエールの一件前からちよくちよく仕事が出来ていたみたいだけこの頃表紙を飾っているファッション誌を目にす

る機会が増えた。たくさん、モデル事務所から入所オファーも来ていたみたいだけど本人はフリーを希望して一切芸能事務所には入っていない。本人曰く「大変かもしれないけど逆にその方が燃える！」とのことらしい。

その関係で私や春を連れてファッションショーを見に行ったりと結構連れまわされてもう大変！でも私も春も結構楽しんでるよ。

それから祐介。彼も変わらず常に芸術とは何かを求めている。でも班目の弟子とは言わせないと有名芸術家を多数輩出した大学の芸術コースに合格して勉強してる。近々大学を上げての出展式があるといってたなあ。

そして双葉はなんと、学校に通えるくらいになったみたい。私たちとたことが何か変わったのかしら？そうだといいわね。それに最近聞いた話だと学校の友達と遊びに出掛けることもできるようになったみたいでよかったわ。惣二郎さんは涙ぐんでた。

春はというと奥村フーズの大幅なイメージダウンを回復させるため大学でビジネスや経営学を学びながら奥村フーズ跡取りとして日々奮闘しているみたい。その息抜きとして私や杏が連れ出すんだけどね。

最後にリーダーの蓮。彼は保護観察処分が終わった後3月には一旦家族のもとには戻ったんだけど1年前前にジェイル騒動で再び怪盗団を結成しすべて成し遂げたあと、再び帰郷していった。けど大学を期に上京してきて彼はなんと大学の傍らルブランで

アルバイトしている。さすがにアパートは借りたみたいだけど惣二郎さんのご厚意で屋根裏部屋はそのままみんなが忙しい中、集まれる場所としてそのまましてもらっている。因みにモルガナも一緒だ。

その1年後にはジェイルといったパレスとは別物の異世界での戦い、

そこで仲間になった善吉さんは今も警察官として奮闘しているのかしら。茜ちゃんにもまたあいたいわね。

ソフィアは心をもつAI。今ごろ一之瀬さんとどこを旅しているんだろう。

ジェイルとの決戦後完全に私たちはペルソナとの契約は解除され一切力は出せなくなったし。パレスやメメントスにも行けなくなった。

けれどこれでよかったんだと思う。本来この力はない方が良いのだから。

あと驚いたことに獅童と大衆たちを改心させた後4か月後立つたくらいから徐々に、精神暴走事件や廃人化させられていた人たちが次々に目を覚ましていったの。

テレビでも大々的に報じられたのを蓮やモルガナはいなかったけどルブランで見ても驚いた。

様々な憶測で「心の怪盗団」が何かしたのではないかと報じられたけれど私たちは知っている。何もしていないことを。だから同じように助けたいと思った人がやった

のかなと勝手に認識してる。

双葉もそのことについて調べていたけど結局は何もわからなかったみたい。

あ、自分のことはなしていなかったわね。

私は警察官僚を目指して、高卒からではなく大卒のキャリア合格を狙っている。己の正義のために。

カランカラン

「只今。」

「おかえり」

「あれ？食べていなかったの？」

「うん。だっておめでどうって言いたかったし。」

「ありがとう……でもこれから勝負よ。妃先生のところで学んだことを生かすために」

お姉ちゃんは結局検事をやめた。そして雨宮くんの賠償請求でお世話になった妃絵里弁護士の手腕にほれ込んで自ら弟子入り志願。弁護士として勉強を始めた。そして、自分の事務所を構えることが決まったのだ。やっぱりおねえちゃんはすごい。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ただお姉ちゃんの時折このように、上の空になってぼーとしていることも多くなつた。また一人で何か悩んでいるのかなど不安になつて声にをかける。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・お姉ちゃん？」

「・・・・・・・・あつごめん少し疲れてたみたい。ごはん食べましょう」

取り繕つた笑顔を浮かべて何でもないように言う。

「2年前の険しい表情とは全く違う顔。だけど何かを心に押し殺しているのだけわかつた。」

「・・・・・・・・やっぱり。私じゃ頼りないかな？」

気づいたら口から言葉が飛び出していった。

「あつ、ごめんごめん。仕事のことじゃないから安心して。ただ、今の前に進んでいる私を見たら明智君も喜んでくれたかなつてね」

「ごめんね私を祝ってくれているのにこんな話・・・・・・・・」

「さ、ご飯食べよつか。」

「そして、その場ではそれつきり口に出すことはなかつた。」

自室に戻った後、あの場でのお姉ちゃんの言葉がよみがえる。

明智吾郎……探偵王子と呼ばれていた彼の正体は、精神暴走事件や廃人化の実行犯だった。結局は彼も獅童に利用されていただけだったけど、双葉や春の親を殺した張本人。そして、お姉ちゃんも利用した。それを知ったすぐの時は怒りしかわかない最低な奴、そう思ってたけど、リーダーはそうは思わなかったみたい。あいつのことも救いたいといっていた。その時はなんで!?と思わなかったわけじゃないけど、獅童パレスでの真実を知ってしまったら彼も実の父親に認められたかっただけなんだって思ったら私たちと同じだと思った。明智君との戦いで疲弊していたところを認知上の明智君に殺されそうになって、絶体絶命な状況を救ってくれたのも明智君だった。結局怪盗団メンバーを遠ざけるように防御壁まで張って身を挺して逃がしてくれた。ようやく分かり合えた。そう思っていた矢先の出来事。ナビこと双葉ちゃんから明智君の反応が消えたと聞いた時ショックも大きかった。獅童の改心に成功したというのに喜びもなくルブランへと戻った私たちは涙を流し続けた。こんなはずじゃなかったと、初めから信頼を寄せていたわけじゃなかったしでも、うわべだけでも作戦を真剣に意見を交わす瞬間は楽しかった。

反応が消えたことをお姉ちゃんに言ったとき「そう．．．」としか言わなかったけど家で陰に隠れて泣いていたのを知っている。

お姉ちゃんにとっても大切な存在だったんだ。もしかして弟のように感じていたのかもしれない。そしたら、私たちは兄妹だったのかもしれないわね。

もうすぐ、お姉ちゃんの仕事所が出来上がる。少しでも元気になってもらいたいと思った私は怪盗メンバーチャットを開いた。

チャット

〈ちよつといいかしら?〉

〈何だよ?〉

〈反応速すぎ〉

〈暇なの?〉

〈うっせーよ、杏!今日は午前講義ですぐバイトだったから夜時間空いてただけだつ

つーの〉

〈ふふっ相変わらず元気ね〉

〈うるさいとも言う〉

〈早く本題に入れ。既読は全員ついているから雨宮もいるんだろう〉

〈ああ、どうかした?〉

〈お姉ちゃんのことなんだけど。〉

〈この前弁護士国家試験に合格して、妃先生にも認められて自分の法律事務所を開くことになったんだけど〉

〈すごいじゃない!!〉

〈さすがですね〉

〈早いな〉

〈おめでどう〉

以下おめでどうの言葉が続く。

〈ありがどう、妹として誇りだわ〉

〈だけど、そのことについてちよつと話したいことがあるの〉

〈明日、30分でもいいからルブランに集まれないかしら〉

〈あら?何かしら〉

〈おおいぜ!ちようどバイトも休みだ〉

〈俺もいいだろう。少しルブランのコーヒーを飲みたい気分だった〉

くいつでもおいで、惣二郎さんにも言っとくへ
へありがとう、じゃあまた明日ねへ

そうチャットを閉じた。

次の日、全員が集まった。

「で、昨日の話はどういうことなの？」

「うむ、文面からも何か悩んでいるようだったが」

「ええ、お姉ちゃんのことなんだけど。」

最近上の空のこと、思い切って聞いてみたら明智君が見たら喜んでくれるかなといわれたとのこと。

.....

全員が口を閉ざしてしまった。思えばあの事件以降自然と明智君の話題を出さないようにしていた気がする。特に被害を受けたメンバーがいるのだ。やはり不謹慎だったかもしれない。

「ごめんなさい。やっぱりみんなの前ですの話じゃなかったわね特に双葉と春がいるのに」

「いえ、もう2年たつて父のことは消化してきているのです。だから、突然で驚いてしまつて」

「私も、全然。もう学校に通えるぐらいなんだから大丈夫だぞ。」

「そう？ そういつてもらえると有難いわ」

「でもさ、明智つて何だかんだ憎めない奴だったよね。なんか年上なのに弟っぽいつて言うか。」

「そうだな。はじめは気に食わない奴だったし裏切りも、死んだ奴のことを考えるとぜつてえ許さねえつて思つてたけどよ。最後だつて明智が身を挺し助けてくれなかったら全員死んでたんじゃねえかって」

思つちまうんだよねあ

「ねえ、モルガナ。本当に反応が消えると現実の人物も死んでしまうの？」

「ワガハイも死んでいないという特例を聞いたことがない。それにシャドウの死は本物も死んでしまうのはわかっているがパレス内に入った本人が消されれば順当にいけば」
「そういえば、明智君のこと何にも知らなかったのよね」
もつと早く知りたかったなあ

.....

再び、沈黙。

「ああもう、辛気臭い話はやめにしよ!!」

冴さんに元気になってもらえる方法が知りたかったんじゃないの？

「そ、そうよ。何かプレゼントとかか？」

「真は冴さんが好きそうな物とか知ってるの？」

「うーん、日常で使える物とか？」

「それってプレゼントって言えるか？」

「じゃあさ、一緒にみんな旅行とか行ってみようよ!!」

ジェイルの時はそれどころじゃなかったし.....

「それいいかも」

「いい、息抜きになるんじゃないか？」

「ワガハイも賛成だ！」

「じゃあ決まりつてことで！あ、てかさ惣二郎さんも誘ってみない？」

「？惣二郎を？」

「だって、2年前からいろいろ協力してくれたし、怪盗団のこと知っていながらくまっ
てくれた。」

それに今でもこのアジトを貸してくれているじゃない？

「どうかな？たまにはルブランを完全休業にしてみらつてさ!!」

「いいんじゃないか？」

一番、お世話になつていた雨宮が賛成という。

「うんうん。いいと思うわ！」

「おうよー！」

「何かと世話になつてきたしな。コーヒーも無料で提供してくれたりな。」

「そういえば私、惣二郎とどっか行ったことない。」

「ええ、いいと思うわ。お姉ちゃんも惣二郎さんとは協力関係だったみたいだしね」

となると次は場所ね……

「どこにしようかしら……二人とも仕事があるし何日間も休めないだろうし、私たち
も高校の時とは違つて簡単には時間が取れないわよね」

「長くても3日が妥当なところだな」

「遠すぎないほうが良くないかしら？」

「でも県外が良いんだけど。見慣れた景色よりも」

「……横浜とか？」

「横浜かあそいういや、ジエイルの時も最終決戦みたいな感じだったしあまり楽しめなかったよな」

「そうだね。横浜なら日帰りでも大丈夫な範囲だし、もしも冴さんに急ぎよ仕事が入っても何とかなるかも」

「……じゃあ決定ってことで!!」

その日はそれで別れ、私はその日のうちに話した。最初お姉ちゃんは渋っていたが今回はこつちがごり押し。最終的には折れてくれた。

雨宮からは惣二郎さんの了承も得られて日にちはゴールデンウィークの初日から3日間。と決まった。

あれから、集まれる人何人かでホテル決めや行きたい場所、観光スポットを話し合いました（これがかかりきつかった）

そして、当日私たちは横浜に出発したのだった。

横浜に滞在期間中ある事件に遭遇そこでの出会い、会いたいと思っていた人に再開できるとは知らずに。

第15話 元怪盗団との再会篇②

横浜での3日間の小旅行。今までは、怪盗団だけでの移動が多かったが、今回は冴や惣二郎も一緒だ。

まず一日目、横浜中華街巡りを行った。本場の中華やお菓子の食べ歩きをしながら横浜の町を練り歩く。

「お前、モデルのために食事制限をしてるとか言ってなかったか？」

「うっさいわね!! 竜二、今回だけなんだから。めいっばい楽しまなくっちゃ!!」

「あ、シヨツピングモールもある“横浜博覧館”？」

「中華街にもあるのね。」

「ゲームセンターあるかなワクワク！」

「おいおい、双葉ここにきてまでゲームかよ」

「いいじゃねーか惣二郎。珍しいのがあるのかもしれないし。」

「ね、お姉ちゃんはどうする？」

「そうね・・・明日は日が暮れるまで自由時間なんですよ？じゃあ今日中にお土産でも見

てこようかしら。妃先生や娘さんにも買っつけていきたいし。」

ちようどここお土産シヨップ入ってるみたいだし。

「じゃあ私もそうする!!」

「え? みんなと回らなくていいの。みんなと回った方が・・・」

「ふふっ今日真は冴さんと回りたいんですよ!」

「ちよつとつ春!?!」

春の言葉に真が焦り周りを見渡すとにやにや顔のメンバーの姿が見え顔を真っ赤に染め上げたのだった。そんな真に優しい顔を向け

「・・・そういうことなら、一緒に行きましょう!」

「うん! そ、そういうことなら春や雨宮君はどこに行くのよ」

「わたしは、中華街を出て少し歩いたらカトリック山手教会があるみたいなんです。そちらに行ってみようかと」

「俺も、適当にぶらぶらしているよ。猫連れだし」

「猫じゃねーし、けどここは土地勘がないしバックの中でおとなしくしてるゾ」

「相変わらずニャーニャーとしか聞こえないんだが。」

「そうね・・・」

思いっきり何かをしゃべったであろうモルガナに何とも言えない顔をする冴と惣二

郎だった。

そして、1日目を楽しむのだった。

その一方で……

「では、今のところ動きは何にもなかったと？」

総合探偵事務所（DMO）ではピリピリとした霧囲気が漂っている。

「ああ、全員で各市内地区を担当したけどそれらしき人物は見当たらなかった。」

現在は横浜市内で、正体不明の連続暴行事件が一週間前から多発しており今のところ死者は出ていないが、それも時間の問題であろう。しかも老若男女関係なく狙っているらしく一人のときを狙われたわけでもない。完全につながりが見えないのだ。そこで、被害者によれば黒い影の様な突然襲い掛かってきたと話しており、恐怖からかそう思っただけだろうと判断を政府は下したが、異能者なのではないかとの見解を異能特務課が判断し、こうしてDMOに捜査協力が来たのだった。

『横浜市全域の監視カメラをチェックしたけど駄目みたい。それらしき人影はなかったよ。』

「そうか……引き続き。明日もパトロールの強化を行う。場所は……」

国木田さんから明日のパトロール場所を聞いた僕は自室に引き上げようとしたとき。

不意に乱歩さんに呼び止められた。

「明智。明日のパトロールなんだけど、お前パトロールに行くとき9、10人乗りの車で
行つてほしい。」

不意にその言葉をかけられた。

「それは構わないですけど。何かあるんですよね。」

「うん、でも君にとつては必要なことだと思つうから。」

「わかりました、指示に従いますよ。トヨタハイエースでいいですよね。」

ああ

「分かりました。明日もパトロール頑張つてきますよ」

雲隠れ期間1年半くらいで坂口さんから問題なしと終了が言い渡された。そして、今
回の仕事が自分のDMOとしての最初の大仕事となるのだった。

2日目 DMO社員がそれぞれパトロールに出掛けている中……

「今日は午後まで自由時間だったわよね。」

「ええ、17時によこはまコスモワールドの前に集合よ。暗くなった後のイルミネーションは絶景らしいわ。」

「楽しみです！」

「そういえば。お前たちどこに行くのか決めたのか？」

「女子組は横浜ワールドポーターズよ。コスモパークに隣接しているショッピングモールなのよ。ここ結構いいお店そろってんだって！」

「ほお、冴さんもか……」

「ええ、化粧品を見たくって。集合場所にも近いからって。」

「俺はもちろん横浜美術館だ!! いいインスピレーションが浮かびそうだ。」

顔にワクワクと書いてある。

「二」 祐介らしい 「三」と全員が思った。

「俺と、雨宮は決まっているわけじゃねーけどどうせならいろんなところ行きたいよなあ!!」

「確かにな」

「言つとくけど時間は守ってよね!!」

「わあってるって！」

というわけで行動をそれぞれが取り出した。

17時には約束通り全員がコスモパワーに集まりその時を迎える!!

そして一齐に壮大な景色が目には焼き付いた!

「キレイ!!」

「うんうん。これが普段見ない景色というやつか!？」

「ワガハイ、一緒にこれてよかったぞ」

そして、最大の景色を一通り楽しんだ後どうするという予定もなく気づけば赤レンガ倉庫の近くまで来ていた。

「あ、ちよつとごめん少しだけ離れるわ!」

「どうした? 便所か?」

「ホント竜二つてデリカシーない!」

「なら、俺もホテル戻る前に言っとくか。」

「そうだな。」

「ええ、じゃあみんなが行くなら私も!!」

「ふふっ」

「このくらい時間にお前らだけじゃ危ないだろうが!!様子見てくるとするか」

最後には惣二郎までもがその場を離れてしまい。

「もしかしてこれって……」

「気を使われちゃったわね……」

2人して苦笑いをする。

「……ありがとう。」

「え?」

「私に気を使ってくれたんでしょ。」

「それは……」

ばれてたのか……

「だって、明智君の名前出してから様子おかしかったもの。姉妹でしょ?分かるわよ。」

「うん……私の知らないお姉ちゃんを知っている明智君がうらやましかった。だから、

ちよつと嫉妬しちゃった。」

「真……」

「だけどね、パレスの中で最後に明智君が言ってくれた言葉がまぎれもない本心だった。」

今でもあつて思っていること伝えたいなあ……」

無理だと分かっている。それでもおもわずにはいられなかった。

「それは……っ!!」

お姉ちゃんが話をし始めた時不意にお姉ちゃんの雰囲気が変わった。これは検事だった時の雰囲気だ。

「お姉ちゃん?」「しっ静かに」

そして、静かに息をひそめていると。何やら声が聞こえてきた。ただならぬ雰囲気だ。明らかに怪しいと私でも分かる。

ただ、この距離では内容までは聞こえない。

「どうするの?」

「少しだけ近づくのよ。ただ慎重にね。」

「うん」

おねえちゃんの指示通りに赤レンガの壁を伝いゆっくりと距離を縮めていく。

次第に内容が聞こえる距離に入ってきていた。

「……きよ……決行……だ」

「(決行?何を?)」

「いのう……よ……まこ」

「(いのう? 異能力者のことかしら。)」

もう少し……と聞き出そうと二人で耳を澄ましていた時だった。

「おーい!」

「え?」

「キャッツ!!」

カラン

「だ、誰だ!？」

「(ま、マズイ!) 今すぐ離れるわよ!!」

「う、うん?」

?を浮かべている竜二や、そのあとを追ってきた他のメンバーにすぐに離れることとは告げ、真は竜二の腕をつかみすぐに走り出した。

逃がすなー!!と怒鳴る声を聞きながら。

その数分前

「今日もこれじゃ収穫なしかな……」

『いや……こういうやつらは今までの被害者も夜襲われたんだ。まだ、安心するのは早い』

「そうだよ。それに乱歩さんから言われたんだろう。」

確か9人乗りぐらいの大型車でパトロールしてくれだっけ？

「はい……今回の、見回り場所決めたのって誰でしたっけ？」

『乱歩さんだよ。』

「やっぱりそうなんですな。」

イヤーマニタを装着した状態で太宰や翼と通信で会話をする。ほとんどの人が現在パトロールしている状況の中翼はいつも通りの情報分析、太宰が現場指揮を本社から行っている状況だ。

そして、明智は現在赤レンガ倉庫が大幅に見渡せ、相手からは死角になる場所に車を止め待機していた。

その時だった

「ん……?」

『どうした? 吾郎』

「今何か黒い影が……」

『ちよつとこつちでも確認してみる』

明智は遠くを走り去っていく姿を目を凝らしてみても愕然として。

「え……なんぞ!？」

険しい表情、2年前までは当たり前のように見てきた冴の姿、そして、そのすぐ後ろには同じく何か焦つて逃げているような表情の真そして、何が何だか分かつていなそうな他のメンバーの姿だった。惣二郎もいる。

そして、20秒ぐらいたつてから怒鳴りながら走る黒い帽子にサングラスの男たち。明らかにおかしい状況だった。

「すみません……後を追います。」

居てもたつてもいられなくなった明智は指示を聞く前に車を飛び出し男たちの後ろを気づかれないようについていった。

本社では

明智が車を飛び出した後、

『原因はこれだな……』

「なるほど……」

監視カメラにはバツチリ冴たちの姿が写っていた。

その様子を見て太宰は明智に呼びかける。

「吾郎君聞こえるかい？」

男たちに気づかれぬよう車の影などに隠れながら距離を取って後を付けていた明智を呼ぶ太宰の声が聞こえてきた。

「すみません。太宰さん、勝手に飛び出してしまつて。」

「いいよ。こちらの方でも姿が写つたからね」

誰の姿が写つたのかは明白だ。

「で、吾郎君は皆と会いたそうじゃなかつたよね？この状況で大丈夫かい？」

確かに、以前初めのころ生存を知らせるのかと聞かれたとき嫌だと答えた。それは今でも変わらない。だけど……

「確かにあまり会いたくはないです。今でも特に冴さんと双葉さん春さんへには特にひどいことをやってきた。合わせる顔はないと思つてます。だけど、ここでもし何かあつて見捨てたりしたらそれこそ後悔します。それに探偵ですから！」

力強く言い切つた。

この声を聞いた太宰はもう大丈夫だと思つた。

「わかつた。そのまま慎重に尾行を続けてくれ！」

一方冴達は物陰に身を潜めていた。

「で、どういうことだよ。」

この状況でさすがに空気を読んだのか小声で竜二が話しかけてきた。

「さつき。あなた達がお手洗いとか行ったあと、黒服姿のサングラスの男たちが会話し
てた」

「ちよつと気になって、話が聞こえて来る位置まで移動して少しだけ聞こえてきたのよ」
「確か、今日、決行あと、いのうとか言ってたわね？」

「?今日決行・・・っていうことは今日何かが始まるわけだな。」

「いのう?てなんだ?」

それが何なのか?

???学生組には次々に?が浮かぶ?

その問いには冴が答えた。

「検事時代に公安や他の警察官が話しているのを聞いたことがあるわ。いのうというのはおそらく異能力のことね。現代には起こり得ない特殊な力。それを持つ者のことを異能力者と呼ぶらしい。100年くらい前なら1割に満たなかったみたいだけど、現在

の水準だと確か……3〜4割くらいの方が持つてゐるらしい」

大なり小なり、本人に自覚があるかは置いといてと続ける。

「それなら、俺も聞いたことがある。自覚があつて、力をコントロールできる人はそのうち1・5割程度みたいだがな。」

「ワガハイのパレスの時のペルソナみたいなものか?」

確かにあの時の力は相当なものだった。だけど……それが現実で起これば……同じことを思つたららしい双葉が口に出す。

「あの力つて、パレスでも相当な衝撃的だった。」

「確かになあ。この力があれば……つて途中調子乗つたちまつたところもあつたし」

「……ねえ。ああ言う力が現実世界で暴れでもしたらどうなるんだろう。」

「ねえちよつと待つて!!今日決行つてまさか!!」

「そのまさかだよ。お嬢ちゃん」

「!!!!!!」

どうやらしゃべつてゐるうちに声が大きくなつていたらしい。向こうに気づかれてしまつたらしい。

「……あなた達何する気?」

「さてな?俺たち話そんなの知らねえな。ただ、この力を使えば横浜ぐらい完全に壊滅

させられる!!」

「なんで?! そんなこと……」

「おっと、叫ばないほうが身のためだぜ。俺たちは金で雇われた殺し屋だ。この地が血の海となるのを見届けたらいい」

男は銃をカチャツと鳴らした

そして、黒い玉からたくさん黒い玉が現れたのだった。

様子をうかがっていたがついに冴さん達が奴らに見つかってしまった。これ以上は見ているわけにはいかない。

さらに男が持っていた黒い玉からいくつもの化け物が放出された。

さらに別の方でも同じような黒い怪物を視認した。

「……太宰さん。」

通信で呼びかける。

「吾郎君。君の見たとおりでよ。おそらくあれは異能力を凝縮されたものだろう。あの

化け物をすべて倒せば黒い玉も徐々に小さくなつて消えるはずだ。だけど、同時に君のいる東、それから西、北、南全方位で確認されている。」

そこで……君にも戦ってもらいたい。

「え……」

「君は1人じゃない。それに、横浜を守るため、大切な人たちを守るために」

「……はい、分かりました!!」

「必ずそつちに援軍を送る。それまで持ちこたえてくれ!!」

「分かりました!行つてきます」

行つてらつしやい。そう言葉を返し、

「翼君。東側が一番異能の結晶が大きそうだ。誰か援軍を!!」

『すでに全員に通達済み!だけど……どこもそれなりにいるみたい!!』

しかし一か所から反応があつた。

〈太宰!聞こえるか〉

「なんだい?」

颯爽逃げられる隙間などなかった。

冴は、焦っていた。この子たちだけでも守らないと。弁護士になつた意味がないのに
「……………これが異能の力」

「さっそう詰み……………だな」

「つつくそー！」

全員声が震える。

その時だった。

「そんなことはさせない!!」

懐かしい声私たちが守るように立ちふさがつたのは……………

絶望してうつむいていた顔を全員が上げる

全員が顔を上げると、本来いなくなつたはずの人。怪盗団にとつてはパレスで怪盗団を守るために一人で認知上の自分と戦つて相打ちになり反応が消えた人。

「あ、あけち……………か？」

雨宮のその問いにその人は答えない。

こちら側は全員がピンチだということも忘れて啞然とその人に後姿を見ていた。

制服姿だった彼しか見たことがなかつたため、白いシャツに黒いジャンパーなラフ姿

というのが新鮮に映る。

「ああ？だれだあお前。この嬢ちゃん達の知り合いかあ？だがこの数でめえ一人が来たところでどうする？どうもできやしねえよ」

ギャハハハハ!!!

男たちは下品な笑い声を出す。

その言葉に私たちはハツとする。

しかし、明智君ひどく冷静だった。覚悟を決めたような顔つきをしていた。

その表情にパレスのことを思いだした。

それは全員そうだった。

「明智……お前……まさか？」

「明智君……」

そして、その時を知らないお姉ちゃんまでもが顔面蒼白だった。

「あなた……まさか!？」

そして、私もあの時彼を失ったときを思いだす。

「……ほんとみんな優しいな。あんなことした僕を心配してくれる。」

「そんなの当たり前だろ？だって俺たち仲間だろう？」

私たちは力強くうなづく。彼を失いたくなくて

ようやく彼がこちらに顔を向ける。ああ……やっぱ明智君だ。

その時の表情は確かに覚悟を決めた表情をしていた。だけどどこかしら決意を決めた表情。だけど死ぬ決意ではない絶望ではない。光が宿った目をしていった。

「大丈夫だ。俺一人じゃない。彼らには傷1つ傷つけない!!」

異能力へペルソナ：ナイトウォーカー!!

明智君が叫んだとたん黒と白の光に包まれ次第にその姿、現れた。

しかしそれは……

「ペルソナ!?なんでパレス以外でペルソナが!?!」

「ていうかそんなペルソナあったか?」

やはり一番モルガナが驚いていた、そして、お姉ちゃんや惣治郎さんも初めて見る本物のペルソナに驚いている。

「真……これがあなたが達がパレスに行っていた時の戦う力なのね。」

「うん……だけど明智君のあのペルソナは見たことない……」

「それに……あのペルソナ“ナイトウォーカー”と呼んでいたな。かなり強そうだよ!!」

「あれは……ロビンフットとロキだ!!」

「うん?それはどういふことなんだ?」

雨宮君の発言に祐介が疑問を持つ。

それをモルガナが肯定した。

「確かにな．．．．あのペルソナからはロビンフットとロキの気配がする。」

【それはそうだろうな。】

不意にどこからか声がする。

【フン．．．．懐かしい顔がそろっているな。】

まさかペルソナがしゃべっている？

「ナイトウォーカーは僕の異能力として生まれ変わった。表向きの顔だったロビンフットそして、裏の顔だったロキ。それが一つになった姿．．．それがナイトウォーカーだ。」

「貴様!!異能力者か!?!」

「だが、一人だけだ!!」

「やっちまえ!!」

「とにかく、話は後だ!!ナイトウォーカー!最優先は彼らにけがを負わせないことだ!!」

頼む!」

【承知した】

そして．．．．戦いが始まった。

戦いが始まってどれくらいたっただろう。

「(僕のやるべきことは、今この場でこの怪物たちを殲滅することじゃない。彼らをけがさせずに安全な場所まで避難させること)」

ちらつと彼らを見る。

現に今現在殲滅ではなく後ろに後退しながら戦っていた。そして、彼らに傷つかないように攻撃が行きそうなたらすかさずカバーしながら僕の指示に従ってくれているナイトウオーカー。

援軍が来るのはいつなのだろうか。太宰さんは始まる前に援軍に来させるといつてくれたが、

「なかなか、数が減ってかないね！」

「それはそうだろう消しても消しても出てくるのだから」

「ただだけあの結晶には異能力が詰まっているのか!!」

「それは、彼が撤退を目的に動いているからよ。」

「ええ・・・あくまでも私たちが逃がすためのね」

さすがは元怪盗団。冷静になるのは早かった。

「ナイトウォーカーが突撃すれば私たちは丸腰になる。そうすればこちらにあの怪物たちは来るでしょうね。」

「今の私たちって完全に足手まといよね……」

その春の言葉に全員がうつむく。

「それはねえよ。あいつはお前らを本気で助けたいんだ。足手まといなんか思っちゃいねえよ」

「そうですよ。前はいろいろあったみたいですけど、少なくとも今のあの人はみんなが守る対照なんです」

まあ僕たちもなんですけどね。

「えつとあなた達は？」

「ん？援軍!!」

1人の小柄な帽子を被った男性が高くジャンプしたかと思えばあつという間に明智君の目の前にいた怪物を消してしまった。

「よお、お疲れさん。よく頑張ったな!」

「すみませんお待たせしました!!ここからは任せてください!!」

「中也さん、敦君!!」「何!?重力操作の中原中也に月虎の中島敦だと!」と

明智君はほっとしたような顔をした。

〈吾郎君、援軍はそっちにいったかい?〉

見計らったかのように太宰から声がする。

「ええ、今ちようど」

〈わかつた、中也遅かつたじゃないか〉

「うっせえよ。予想以上に怪物が来る途中も多くてな。」

「すみません!太宰さん!」

〈じゃあここからは東は頼んだよ。吾郎君は・・・〉

「これから、全力で撤退を開始します。そっちに向かえばいいんですよ」

〈うんうん。分かっているみたいだね。じゃあ頼んだよ〉

通信が切り。他のみんなへ貌を向ける。さつきはすっかり見なかったが2年がたちたち大人っぽい雰囲気になっていた。

「ここからは、全力で撤退します!ここは彼らに任せますよ。ついてきてください」

有無を言わさずに行つたおかげか誰からも反論なく、止めてあつた場所まで戻る。

「さあ乗ってください」

奇しくも9人乗りが役に立つた。

「(乱歩さんはこれを読んだのか・・・末恐ろしいお人だな)」

全員を乗せ車を発進させた。

「ふー、何とか脱出できたわね」

横では先ほどの小柄な男性が、飛び回りながら空中戦を繰り広げており、少し離れたところではもう一人が虎に変身し怪物をつぶしていた。

「おおー、圧巻だな。」

モルガナが声を上げる。

「明智・・・彼らが仲間なのか。」

「ああー。命の恩人だ。っとまだ、どうやら終わっていないみたいだね！」

その言葉に後ろを振り返ると車に乗った男たちが追ってきていた。

「あそこには奴らの仲間がまだいたみたいだな。」

「っしっこい!!」

「どうするんだ明智。」

「もうそろそろだ!!」

「よし、ここからは俺が誘導する。」

「え? 誰?」

車に搭載されたスピーカーから声が聞こえてきた。

誰なのか聞いてきた言葉を無視し、翼に問う。

「ああ、頼む。こちらもスピードを上げる!!」

そして、スピードを上げながら路地裏を回りながら奴らが追ってこないように翼の正確なナビゲートのもと元振り切ることに成功した!!

「よし、後ろは?」

雨宮に聞く。

「うん。誰もいない。」

「まくことができたみたいだね。」

〈引き続き警戒しながらナビを続ける〉

「ああ。」

まくために少し離れてしまったが数十分で目的地：本社につく。

5分間どうやって切り出そうかと思うほど沈黙が続く。

誰も話さないからか、話し始めたのは全く別のこと、しかも予想していないことだった。

「なあさつきあいつらまいたドライブテクニックもすごかったけどさ、カーナビに路地を通るルートが写ってたよな?それって誰か主導でその道を誘導したんだろう?どういう人なんだ?」

後部座席に乗っている双葉がワクワクとしている。

「(その空気の読めなさ加減が素晴らしいわ。でも助かったわね) そうね・・・」

「あ、ああ、それはうちの情報収集担当がこの車のカーナビだけをハッキングしてルートを見ながら誘導しているんだ。」

〈フフフうちの翼はすごいんだぞう?〉

〈太宰さんうるさい〉

「話聞いてたんですか?」

〈まあみんなだんまりになってしまっていたからね。いつこちらから話しかけようかと〉

「・・・で、どうかしましたか?」

〈今の戦況をお知らせしようかと〉

なんせ、君たちがいる東だけで起こったことではないからね。

その言葉に・・・ピリツと引き締まった。

〈改めて、私は今回の総指揮を務めさせてもらっている総合探偵事務所(DMO)の太宰治だ。今回の事件では君たちのことは完全に巻き込んでしまったし、吾郎君とも知り合いたいだし。話せるころまでは全てはなそう。そちらの代表は誰になるのかな?〉

運転している明智以外で目配せする。怪盗団のリーダーというと兩宮だが、今回の場合は。

「元検事で今は弁護士をしているのは新島冴よ。話してくれるかしら」

「ええ、といつても。一齐に起こったこと概要事態は戻って来次第話します。知らない人のメンバーも出てきますがその紹介もおいおい……まずは今の戦況です。君たちがいた東側は現在も中也と敦君によつて対処中。かなり数は減ってきています。そして南側は芥川がほぼ一人で敵殲滅中。こちらはもうほぼ終わりに近づきつつある。そして西側は国木田君と鏡花ちゃんやんが戦闘中。北は賢治君と尾崎さんが対処しています。だけど元々こちら2つは南と東に比べて数が少なかったため特に問題はない。そして芥川の直属部下黒蜥蜴は各々それぞれの方角のサポート。今現在特に戦いが激化している東と南以外は異能特務課と連携。そして、谷崎君と織田作が横浜県警と一緒に一般人の避難誘導と負傷者がいるのかの確認をしている状況だ。」

「そうなのね。ということは今現在ピンチなところはないのね？」

「はい」

その言葉に一同ほつとする。

「あのよお。南と東は大丈夫なのか？だれもサポートに行つてないみたいだけど」

「あ、確かに!!」

「ああ・・・そこを担当している異能力者の問題かな。あそこは確かに一番激化している場所だけど逆に間に入った方が危ない」

「え?」

「さっき話したわよね。使い方次第では国家を落としかねない危険な力を持っている人もいるって」

「さっきそこを担当しているメンバーたちは実際にとてつもなく強い異能を保持している。だから、間に入る方が危ない。連携できるくらい同格の力を持っているならともかく」

なにわともあれもうすぐ到着しそうだね。話はそれからだ。

通信は切られそのまま本社へと車は走っていくのだった。

原作へ

第16話 再開篇③

ウィーン自動ドアが開き中に入る。

「おかえり、吾郎君。」

「只今帰りました。翼もありがとうございます。」

『たいしたことない。みんな無事でよかった。』

明智が戻るとそこには総指揮官の太宰、古代書（アーカイブ）で他の戦況確認作業中の翼、そして乱歩や、与謝野の姿もあった。

「9人乗りの車で行つといてよかっただろ？」

「はい、乱歩さん。」

次々と言葉を交わす明智の姿を見て、信頼されているんだな、認められているんだなと複雑な思いと、獅童のことがありよかつたなという思いが交差される。

「あ………」

明智が何とも言えない顔をこちらに向けてきた。

「あそこの部屋を使って今思っていることを伝えおいで？ 君たちも思うことはあるだろう？」

「でもまだ事件は終わっては……」

「君は無傷で彼らを守り通し、ここまで連れてきたそれだけでかなりの功績を上げた、あとは任せてくれて大丈夫だよ……」

それとも……先輩たちのこと信じられない？

「いえ、そんなことは……わかりました。1つ部屋借ります」

やがて観念したのか彼らを連れて、部屋に入った。

「やれやれ、明智も言わなきやいけないこといっぱいありそうだったのに。ホント頑固」
『太宰さん……あんだだけ、任せろ的なことを言つといて逃げられたら面目充てられないから』

「ああ、分かつてるよ。もうすでに終盤戦だ。私もそろそろ、出ようかな。東側の状況は」

『もうすでに、全化け物倒し終えてその異能結晶持ってた男たちも全員確保済みだよ。吾郎の車を追いかけていた男たちも途中で特務課に確保されたよ』

「なるほど……じゃあまた中也に手伝ってもらおうかな？ 敦君には異能を解除して、谷崎君たちと合流を。他の方角を担当している人たちもその方角の敵が前線滅終えた

ら各々撤収に、そして私は……」

最後の首謀者のもとに……

太宰は出ていった。

「……まあ、もう終わりそうだし。与謝野、部屋から出てきた明智達のために冷やしタオル用意しといて」

「はいはい。」

一方で、一つの部屋に入った明智達は終始なから話せばいいのかわからなかったのに沈黙していたが、明智が口火を切った。

2年前のこと、ほんとはどう思っていたのか、自分自身のこと、双葉や春への謝罪の言葉どれも重いものだけど今の明智の真心を知ったことでそれぞれがぼつりとあの年のことを話思いの竹をぶつけた。明智も真摯に受け止めた冴はおもむろに明智を抱きしめた。

「!？」

「お姉ちゃん?……」

「ぶじでよかった……」
「!!」

冴は泣いていた。そのことに全員が驚いた。特に妹である真は。

元々は冴を元気づけるために企画した横浜旅行だった。結果としては絶体絶命に陥ったけどある意味最高のプレゼントが待っていたとも言えた。

これには全員が涙を浮かべた。

雨宮からは片方だけの手袋が渡された。

「!!っこれって……」

「ようやく……約束が果たせた……」

2年前にメモメントスでの約束がようやく果たされたのだった。

「最後になったけど獅童を改心してくれてありがとう……約束守ってくれてありがとう……」

今言葉に全員で頷き肩をたたきあい。号泣し、ようやく和解した瞬間だった。

少し落ち着いてきたころ合いを見計らって。モルガナが明智に尋ねた？

「ところで、獅童パレスでお前の反応自体が消えた。消えれば死を意味するんだが何があつたんだ」

「僕はそこで殺されたと確かに思ったんだ……. . . . だけど」

みんなにあの後何があったのかを告げる。ここ横浜の湘南海岸で衰弱した状態で打ち揚げられた僕を太宰さんと国木田さんが見つけ、ここDMOに運んでくれたこと3か月間目を覚まさなかったこと。僕の認知が太宰さんの異能だけは聞かなくて探偵王子ということ覚えており僕のことを調べるように指示していたこと、翼の異能でいろいろ調べられるたこと。

「だから、彼ら共通点がある人までは僕が何をしてきたのか、パレスのこと、認知科学のこと、全て知っているよ。」

「なんと……. . . .」

ついでにDMOのことについても説明する。太宰さんはなぜか制限なしでしゃべっている。いいといわれた。

異能力者が多数入社している総合探偵事務所ということ。

「異能については……. . . . さつき車から見たわ。」

「太宰さんってあの茶色のトレンチ来ていた奴のことだろ？ 奴の異能って何なんだ？」

「ああ、異能無効化」

「無効化……. . . .」

「つまり、異能力が全く聞かないってということ。」

「それってチートじゃねーか!!」

「まあ弱点もあるけどそれは話さないでおく」

まあはなしても問題はないだろうけど。

「たぶん太宰さんが言うにはパレスの存在自体が異能力として認識されたんじゃないかって」

「そうか・・・明智は一度パレスで反応がなくなった。つまりはその時点で大衆から認知されなくなった。だけど太宰ってやつはその無効化の力で認知という異能力(?)を打ち消したから明智のことを探偵王子と認識できたってわけだな。」

「たぶんそうだと思う」

あと、これも一応はなさなければ。

「だけど、認知されなくなっただってのも完璧じゃなかったみたい。これは普段から勘が鋭い探偵社員だからかもしれないけど幹部がみな俺をみて、どっかで見たことあると思っただらしい。」

「へ!?!それって。思いだす可能性もあるってこと!?!」

「おいおい、それってまずくねえか?」

「折角、安全に暮らせるかもしれないのに」

「思いだされたら台無しだな。」

思い込みがかなりある大衆。すぐに手の平を返すところをいやというほど見てきたメンバーが不安そうな顔をしてきた。

「ありがとう心配してくれて。でも大丈夫だから」

そう僕は言いその後の話をした、異能特務課の中に記憶封印できる異能力者がいること。それで話し合いの末東京だけでなく全国に異能での記憶封印に踏み切ることにしたこと。

「以前の僕の姿は、存在すらしていないんだ」

「いいのかよそれで・・・学校の奴らだっていんだろ？」

「いいよそれで、みんな僕のこと探偵王子としか見てなかったから仲良かった奴いなかったから」

それに・・・

「ホントは全員・・・君たちのことも対象に入っていたんだ。」

その言葉に息を呑む

つまりはその異能がかけられたら最後明智のことをすっかり忘れてしまうということだった。

「パレスでお宝を盗めば改心するというというある意味洗脳みたいなことをワガハイ達

もしてきたが、現実世界でそんな洗脳みたいなことができるのか？」

異能は恐ろしいな。

「でも、実際は私たちはあなたのこと覚えているわ」

「僕がお願いしたんだ。僕自身、覚えてほしかった。実際に他より縁があつたあなた達と獅童には……」

「っ!!獅童は覚えているの!？」

「ああ、自分で息子のことを証言した、それなのに息子がいないなんて言いはじめたら証言が食い違つて混乱するだろ?それに意趣返しさ、一生後悔しろつて」

「そつちが本音だろ?」

「あ、バレバレかな。とにかく、力の使い方を一歩間違えると大変になる。それこそ、現実で証拠もなく精神暴走を起こせる人がいるかもしれない。」

くくり……

「それは覚えていてほしい」

「あ、それから?あのペルソナつてロビンフットとロキだよな。なんで現実世界で出せるようになったのか」

「うん、実は俺もよく分からない。」

そうなのだ。ナイトウォーカーは何故出てきたのかもよく分からないが本人によれ

ば意志の強さだというのだ。

元々、ロビンフットとロキ、2つのペルソナを所持していたが、どちらも俺自身の性分だから、それを認めたことで1つに融合されたのではないかということだった。

「でもさ、それってなんだかうらやましいよ。」

もう私たちは出せないだしさ、っと杏がさみしそうに言う。

「明智は俺を特別だといっていたよな。だけどやっぱり明智も特別だよ。」

雨宮はそういった。

「これからはあなたはここで生きていくのよね?」

「はい、大学には行かず探偵の心得を1から鍛えていくつもりです。起こした事件を語っていくのではなく誰かに起こされた事件を解決して依頼者にホントの笑顔を届けるために……」

「そういえばお前が起こした精神暴走事件や廃人化の件だけだ」

「そういや……4か月後くらいに徐々に回復していつて今ではその事件の被害者は

全員目が覚めたってニュースでやってた!!」

「大宅さんも嬉しそうだったな。」

「ああ、相棒のカメラマンが戻ってきたんだから」

「でも、あれも心の怪盗団がしたんじゃないかって言って好感度上がっていたよな」

「何もしていないのにな」

「正直キモイ」

「複雑よね……」

怪盗団たちの正直な気持ちに苦笑いだ。

その様子を見ていた雨宮が不意に口を開く。

「なあ……その廃人化の解決に導いたのも明智だろう?」

「!!」

「「「 え? 「「「」

「どうしてそう思ったんだ……?」

「明智は自分でしたことをそのままにしておいたままのうのと生きていくという選択をしないタイプなんじゃないかって。それに言ってたじゃないか。異能力者には、使い方を間違えば現実で洗脳状態にすることが出来る能力もあるって……」

「あーそれって」

「使い方を間違えば、意味を変えれば正しく使えば助けることができるということだと思っただ。」

「そうだよ……もとはといえば自分が犯した罪だ大衆から自分が消えたって罪が消えるわけじゃない、どうしようかというときに翼が東京都全病院の精神病棟入院患者のリストを調べ上げてくれた。そこからはどいつをターゲットにしたのか思いだせって」
「そっからはまだ目が覚めて間がなかったけど医務室で書類との格闘の日々だったかな」

「そう締めくくる。」

「そうか……助けるために頑張ったんだな」
「それなら、翼や他のDMO幹部たちに言っただけでほしい。他の人たちの力がなければ成し遂げられなかったんだから」

「そこからはたわいもない話をした。ジェイルの事件のこと、新しい怪盗団がメンバーが増えたこと、今の生活など、気づけば1時間が経とうとしていた。みんなに声をかけ部屋を出た。」

真サイド

明智君を先頭に部屋を出ると先ほどとは変わって、初めて見る（ここの社員なんだろうか？）顔もいた。

「太宰さん、部屋を貸していただきありがとうございます。」

「いえいえ、随分すつきりしているじゃないか。よつほど有意義に話してができたよ
で何よりだよ」

なんだか目が赤いようだけれど。

ニコニコなのか太宰さんが明智君をからかう明智君は恥ずかしそうに顔を真っ赤にしていた。

「やれやれ、そこまでにしてやりな。太宰。」

乱歩さんに言われた通り冷やしタオル用意しておいて正解だったねえときれいな女の人から、タオルを渡された明智君は照れながらも受け取っていた。

なんだか微笑ましくなってその光景を見つめていたらいつの間にか女の人は私たちのそばにも来ていて「ほら」と冷やしタオルを渡していった。どうやら私たちもないたのばれていたみたい。みんなして、照れくさそうにタオルを受け取った。

そこからは、明智君が所属するDMO社主要メンバーの自己紹介が始まった。

太宰さん、国木田さん、江戸川さん、広瀬さん、中島君、谷崎さん、与謝野さん、宮沢君、泉さん、中原さん、芥川さん、尾崎さん、樋口さん、芥川さんの部下黒蜥蜴のみなさんそして、事務員としてアルバイトをしている谷崎ナオミさん。他にもいるみたい

あの事件は私たちが、部屋で話し合いをしているうちに首謀者も確保し、片付けて全員撤収してきたのだそう。どうしてあの場にいたのか後で、警察が事情聴取したいといっているらしい。

そのことにみんなが嫌な顔をした。明智君は逆に気まずそうな顔をしていたが。

「ああ、君たちは警察、特に公安に嫌な思い出があるんだっけか……まあ、今回は公安じゃなくて異能特務課なんだけど。」

その名前はさつき明智君からも名前が出てきていた。確か、記憶封印をできる異能力者がいるんだっただか。

「今回は、異能力者が相手だったからね。異能特務課なんだ。特に、君たちぐらいしか話を少しでも聞いてた人がいないからね。頼むよ」

恩人たちにそういわれてしまえば領くしかなかった。

それから、翼に少し言われたことがある。

『それと、君たち公安を、警察組織を誤解しすぎだと思う。』

何を言われたのかわからなかった。雨宮君を暴行したのも事実だし、自白剤を打ったのもも事実だから

他のメンバーもそうおもったから元々短期だった竜二が声を荒げた

「実際うちのリーダーは被害受けてんだよ!!どこが誤解なんだよ!!」

「だから、公安だから全員がそうだと、警察組織だから全員がそうだと決めつけないでほしいといっている。公安の部署だけでも一筋縄じゃ行かない。警察もどこ派閥とか内部分裂している。人間だから思うことは人それぞれだからね。公安だって自分の正義があつてしつかり仕事をこなしている人たちだつて大勢いる国を守るために。あと、これは君たちも知らないかもしれないけど半年前まで公安の監視されていたのは知っているっ。」

それは知っていただから、余計に公安は嫌いなのだ。だが、それ以降はなぜか監視が解かれていたのだ。

「ちなみに、その監視を解いてくれたのも公安の人だから。」

「!？」

「その人は別の組織を担当している公安の人だけど、あるとき何もなさそうな高校生を監視している別チームの公安を発見してみたかった。不審に思ったその人は何故雨宮君が監視されているのかを徹底的に調べ上げ、獅童による免罪の件なども含め君に非はないと判断し、代わりに彼らに指示を出している上層部の汚職などの証拠を引っ提げ直属上司を介して一斉粛清を行っている。君たちは公安に助けられたんだよ。」

そのこと無表情のままを告げられ何も言えなくなつた。

ふあー。疲れた。変な空気になつたし少し休むよ。

「行つてらっしゃい!!」

太宰さんが返すが、私たちは見送ることしかできなかつた。

「まあ、翼が悪かつたね」

「いえ、思いは人それぞれだからな」

惣治郎さんが言う。

「翼は4年前のある出来事で少し公安を気にかけている部分があるんだ。」

それで、聞いた話は衝撃だった。

公安警察は死と隣り合わせの潜入捜査を主な仕事としてしていること、4年前公安か

らのスパイだとばれた時、当時もう一人が安心して仕事を全うできるように自害しようとしたこと。しかもそれが公安内部に組織の内通者がおりそこからばれてしまったこと。

「……そ、それで。」

「ああ、そのときたまたま追っていた組織の物がこれまたFBIから潜入していたスパイだったこと。もう一人その公安からのスパイが階段を駆け上がった時自害しそうになったその人の持っている拳銃を狙撃で弾き飛ばした経緯がある。」

因みに、そのばれ方を調べた翼が、匿名で内通者を密告と証拠品を通知し、かかわった者たちを一斉に粛清されている。

「だからこそ公安の汚さも、命に代えてでも国を守ろうとする正義、どちらとも知っていない翼だからこそ言える言葉なんだ」

「君たちは、恨みや嫌ったって別にいいんだ。そのぐらいのことをされたんだから。だけど、全ての警察官のことは恨まないでやってほしい」

「ちなみに、その組織はどうなったんですか」

「雨宮君、残念だけどそれについてだけは言えないよ。あまりに大きすぎる組織で危険

も第一だ。パレスに行ける力が今あったとしたってそういうやつらにはパレスなんか
ない。パレスやメモントスは欲望があるからこそ場所があるだけど奴らは殺し屋だ。
ボスの指示に忠実に殺すだけ、裏切り者は全て罰せよ。それが彼らだ。そんな欲望がな
い奴らにパレスは作られない」

そんな組織があると知った、私たちは恐怖で震えあがりそうになった。

「まあ何が言いたいかというと、そういう組織に潜入している奴らはたとえ殺したくな
くても命じられれば殺さなくちゃいけない、殺すという命令に背けばこちらが殺され
る。こちらがころされれば結果的に世界的に滅亡の道が見えてくる。そのぐらい大き
きな組織で精神を削りながら戦っている奴らもいる。だから雨宮君にひどいことした
奴らとそういう人を一緒にはしないほしい。」

1000を守るために1を削るそこは同じなのかもしれないけどね。

「……………僕たちにも何かできることはないんでしょうか……………」

「蓮!!」

「雨宮君!!」

「思ったんだ。確かに俺に暴行してきた奴らは嫌いだし、会いたくないと思った。だけ

どそういう大きな世界をやって、何か個人的にできることはないのかって。ペルソナがいなくなつて何か貢献できないのかって。」

「確かにそうだわ。私は検事として公安の横暴さを知って絶望し弁護士になった。でもそんな中公安でも自分の正義を掲げている人たちのことも知った。嫌うだけじゃなく私たちだけで何かできることはないかと思つたわ。」

「それに……」

明智君にDMO社のことを隠さずすべて話させたのもこういう風になるからと思つたからじゃないのですか

「いやー鋭い。」

太宰さんはそういういながら頭を掻いた。

「君たちには【特別調査員】になつてもらおうと思う」

特別調査員？

「人海戦術的な聞き込み調査なども必要になつてくるときなどに連絡し、聞き込みをしてもらいたい。あとは、もし日常生活で何かに困っている人がいればこのDMO社のことを教えてほしい」

まだまだ知名度は欲しくてね

「これは、アルバイトだ。人に紹介すれば紹介料。情報を提供したら情報提供料を支払

おう。といつても不定期だ。」

毎回君たちに情報送るわけじゃないから……

「でいいですよ？場所が場所なら直接こちらの依頼も手伝ってもらうことになるかもしれない」

「そうなれば依頼料の半分が君たちのバイト代になる」

悪くない話だと思っただけど……

お姉ちゃんと惣治郎さん以外のメンバーで話し合い全会一致となった。やはり、何か手伝いとかしたい。

その覚悟を伝え「心の怪盗団」から「DMO特別調査隊」へとなる決心をしたのだつた。

まあ何人かはアルバイト代にひかれた面もあるみたいだけど。

「そういえば今日はどうするのもしよかったらここに泊まる？」

「あ、でも荷物どうしよう」

荷物はホテルに置いたままだ。

そのことを伝えるとホテルの名前を聞かれた、どうやら、以前ホテルの従業員から依

頼があつて解決してから懇意にしていたホテルだったようで引き取りに行つてもらふことになった。

その間自由に見学してもいいということだったので、明智君に案内してもらつた。

探偵事務所というだけでなく大きな図書館やトレーニングジム、男女別ジャグジー付き風呂、医務室、食堂などなどほんとに会社なのかと思うほどいろいろな施設があり充実しててうらやましかつたわ。

あと、明智君の部屋にも案内してもらつたわ。まだまだ、シンプルだけど中央に置かれていたパソコンでは、今まで解決した依頼を見せてもらつた。

「猫探し、ストーリーカー退治、落とし物探し、迷子相談……なあこれって探偵といふかなんでもや?」

「ハハハツやっぱそう思うよね?でもこれも依頼のうち。こういった小さいことから徐々に信頼信用につながっていくからってみんな言つてるから。」

そう話す明智君はなんだか嬉しそうだった。

そして、隣は徳広瀬君の部屋だそうで、先ほど無表情だけどこか不機嫌そうに戻つてしまったこともありかなり気まづいが明智君がそのまま部屋にノックもせずに入つてしまったため慌てて入るは目になってしまった。

そこは情報収集のスペシャリストという徳島君らしい部屋で、双葉がかなりテンシヨ

ン上がった。

先ほどの件はすでにそこまでは気にしてなく真実を言っただけとのこと。それと【特別調査隊】の件はすでに連絡が言ったらしく。スマホ用のDMO依頼掲示板アプリケーションを人数分作ってくれるそうだ

まだそわそわしているが人見知りが発動している双葉に広瀬君が声をかけてくれて二人でITパソコン談義を始めてしまった。一瞬で広瀬君に懐いてしまった双葉に惣治郎さんは啞然としている。

それから、広瀬君がまれに見る多重能力者という者で、廃人化解決の最大功労者らしい。それを聞いて一同お礼を言った。

そして………

へまもなく、電車が発車いたします。〈

ガヤガヤガヤ

いろいろあつた横浜旅行が終わろうとしている。

3日目はDMOのメンバーが気を利かせたのか明智君に横浜案内の依頼を社長自らしていた。私たちとしても明智君のことをもっと知る機会だし、DMOの粋な計らいだと思つた。

そして、何事もなく楽しいひとときを過ごし17時の電車でこれから東京に帰ろうと
していた。

帰る前に広瀬君が約束通り、【特別調査隊】のメンバーだけアプリをインストールしてくれた。もしも仕事の連絡を取るときはこのアプリか明智君から連絡が来ることになった。明智君も新しく携帯を変えたということで、連絡先を教えあつた。

ホントの仲間になれた瞬間だつた。

「お姉ちゃん楽しかった？」

「ええ……もちろんよ」

そういったお姉ちゃんは満面の笑顔だった。

新宿に到着しそれぞれが、岐路につく。

雨宮は自分のアパートに到着後、チャットを起動する。

「ん？三島達に連絡するの？」

「ああ・・・早いほうが良いと思って」

「だな、だけど話が話だ、直接会って話した方がいいと思うぞ」

「わかってる。」

DMO社で特別調査員になることが決まった時、もう少し仲間が欲しいと太宰さんに進言した。他にも自分たちが怪盗団だったことを知っている人たちのことだ。

我ながら図々しかったとは思う。そうなればその者たちの記憶封印異能を解除しなければならぬからだ。

だけど、三島の情報は侮れなかったし、吉田議員は地道な努力のおかげで今や好感度ナンバーワン議員に上り詰めた。他の議員からの信頼も厚い。何かしら大物の情報が

入るかもしれない。

一二三さんはアマチュアから将棋をやり直し今はかなり戦績もよく、さらに年下の面倒見もいたため慕われているみたいだ。何か言えないことも一二三さんには相談するかもしれない。

大宅さんはジャーナリストだ。相棒が回復したことでかなり落ち着き真実を追い求めているみたい。今後よろしくとっていったし何か情報が手にはいるかもしれない。

武井妙さんは現在も四軒茶屋で診療所をしている。さらに実験していた新薬が好評で学会に行くこともしばしばあるという。本人はめんどくさそうにしていたが医療者からの情報が聞けるかもしれない。

岩井さんはミリタリーショップを現在も経営している。裏関係の情報が入手しやすいのだ。

太宰さんは真剣に話を聞き了承してくれた。

他にも学生コミュニティをゲームを通じて持つようになった織田君は封印解除はないが調査隊のことは教えてもいいということを受けた。

そのことを話す条件に提示されたことは明智はある事件を追っている最中にミスをしてしまい落ち込んでいたところ、そこに居合わせた探偵社員がここで一から修業し

ないかと勧めてDMOに入社するようになった。と説明をしてほしいといわれた。

ある意味嘘はついていない。すぐに全員了承した。

まだ時間はある。チャットで了承が取れた人から会いに行ってみよう。

結果からすると全員から了承の言葉をいただいた。

三島なんかは「怪盗団に情報渡したときみたいでわくわくするね！」なんていわれたが、立場としては真逆なんだけどと思う。

岩井さんは探偵なんか協力するとわなと渋い表情だったが。

大宅さんはさすがジャーナリストでDMOのことも知っていた。相棒の廃人化を回復させたりした功労者だというと即答でOK出してくれた。

ということ協力がが増えたといっても過言ではない。

DMOが許可してくれたと思う（異能を解除するのは異能特務課らしいが）。

もちろんDMO直々の協力者達ではないからアルバイトということにはならないらしいが、僕たち特別調査団（通称：ガーディアンズ）の結成だ。

さあて、今日はもう寝よう。

次の日さっそく、四軒茶屋からの依頼だということで、猫探しの依頼を手伝わされた。

明智からの連絡だったが、楽しようとしてませんかねえ．．．．．
同様に渋谷や新宿周辺の依頼をたまに手伝わされるようになったメンバーたちだっ
た。

第17話 小さくなった高校生探偵と自殺愛好家の出会い

俺は高校生探偵の工藤新一、幼馴染の毛利蘭と共にトロピカルランドに遊びに来た帰り、怪しげな取引現場を目撃した。見るのに夢中となっていたおれは背後にいる仲間に気づかず後ろから殴られ気絶させられてしまった。気が付いた時には警察官に囲まれてあつという間に交番に連れてこられて事情を聴かれたがいくら高校生だといっても誰も信じちやくれねえ。

「だから！俺は高校生なんだって!!」

「何度言う気なんだ？いい加減大人をからかうのはやめなさい!!」

「どうします？保護者がどこにいるのか聞こうと思ったのにこれじゃちが明かないぞ？」

「いつそのとこ施設に事情を説明して預かってもらったほうが・・・」

「(くっそ誰も信じちやくれねえ。このままじゃ連れてかれちまう)」

すきを見て逃げようとしたその時

「ちよつと太宰さん!! いい加減にしてくださいよ。近隣住民の迷惑になりますから、驚いてましたよ! 池の中から足だけ見えた人を見つけて」

「んーんーんーんー。まあ善処するよ。」

「絶対する気ないですよねそれ……」

奥から警察官と茶色いトレンチを羽織ったまだ若そうな男性が歩いてきた。疲れている雰囲気醸し出している警察官とは対照的に男性は呑気そうだ。

「(なんだなんだ)」

刑事には見えない雰囲気だが犯罪者にも見えない雰囲気の持ち主だ。

「ん? どうしたんです?」

警察官のほうがちちらに気づき少し遅れて男性がちちらを向いた。

「いやーこの少年がおかしなことを言っていてね。大したことじゃないので施設に事情を話して預かってもらおうかと」

「(つまずい!!)」

しかし警察官が口を開く前に男のほうがしゃべりだした。

「だったら私が引き取りますよ。」

「(えっ)」

新一が驚いたことに気づいた太宰は一つウインクして警察に向き直りなおも続ける。「私が所属は既に御存知でしょう?」「すぐにこの子の親御さんも見つけて見せますよ」

「まあ、太宰くんなら安心だ。任せようか」

そういうわけで

「さて、少年」

「えっ!? な、なに」

「行くでしょうか。」

「そういい、太宰は新一を連れ出した。」

交番から出た新一は太宰に促され、脇に留まっていた青色の車に乗車した。

「(おいおい、レクサスかよ・・・)」

「ふう、強引にでも行かないと堂々巡りになりそうだったから連れてきたけど良かった」

たかい？」

「う、うん。ありがとう、太宰さんでいいんだよね」

「そうだ。私は太宰、太宰治だ。何やら訳ありみたいだね。よかつたら話してくれるかい？」

ちなみにこういうものなんだけど。そこには【株式会社DMO 調査員 太宰治】と書かれていた。

「(これって親父が言ってたっ!!)」

「私の素性は明かした。今度は君の番だ。」

新一は今日1日で起きたことを話した。

「(なるほど、これは彼らの協力も必要かな)なるほど、これを誰かに話したかい？」

「さっきの警察に。でも誰も信じてくれません」

「・・・まあ、確かに目で見ないと信じてくれる人は少ないだろうねえ」

「でも本当になんです!!」

「まあまあ落ち着き給えよ。あくまでも普通ならという意味で信じないとは言っていないよ」

「えっ!!」

「まあ、詳しい話は落ち着いてからはなそうか、君が言っていた住所はここらへんだと思うのだが……今、あのおじさんは君の知り合いかい？」

太宰が示した方向には煙を発しながら飛び出してきたふくよかな男性がいた。

「博士!!」

太宰が車を止めるのを見計らってすぐさま飛び出す新一。高校生だということを示すもやはり警察と同様に信じてはいないようだ

このままでは夜道で堂々巡りを繰り返すような予感がした太宰は車を少しずつ動かしながらそこまで進み

「まあまあ、少年。信じてほしいならやることは一つじゃないかな。」

君が探偵ならね。

その言葉に目の色を変えた工藤新一は本人以外が知りえない行動を見事に引き当て何とか阿笠博士に自身が工藤新一にであると信じさせることに成功するのだった。

博士の家で改めて自己紹介をした太宰は博士にも事情を説明することにした。

「しかし、薬で体そのものが縮んでしまうとはのう。そんな薬、研究者の間でも聞いたことないぞっ。」

「……そういえばさ、さつき詳しい話をするって言ってましたよね？」

「うん。簡単に言えば工藤君が見かけた2人組に心当たりがある」

「なっ!!？」

「本当かね!？」

「まあね。君を殴った銀髪はジン、サングラスの男がウオツカ。お酒の名前をコードネームにしていることぐらいしか情報がないぐらい謎に包まれた国際犯罪組織だ。」

「国際犯罪組織……」

「ま、正直言っただ探偵といっても一介の高校生が突撃しても返り討ちに合うだけ、荷が重すぎる」

「で、でも……」

「し、新」

「だけど……戻りたいんだろう？」

「っ!!はい!!」

「わかった。この件についてメインで扱っているとところに話を取り付けておこう」

「ほんとですか!？」

「ただし、首を突っ込みすぎないようにね。」

「はい。」

念入りにくぎを刺し、太宰は翼と連絡を取る。といつても自身に取り付けておいた盗聴器で既に話を聞いていたのだが。

「話は聞いていたかい？」

「ええ、全く、相変わらず厄介ごとだけをピンポイントに持つてきますね。あなたは」

「まあでも、これである意味表側から組織に関わる大義名分ができた」

「そうですね。こちらとしても? あちら」に「関わりがある人は多いですから切り口が見

つかれるかもしれませんし、坂口さんと公安にも報告してセッティングしておきますよ。」

「よろしく頼んだ。」

その時、何やらドアの向こうが騒がしくなった。

なにやら面白い気配を感じた太宰は壁際に身を隠しながら様子をうかがう。

そして少年が壁際に高校生ぐらいの女性に本棚まで詰め寄せられた少年は・・・

「ぼ、僕の名前は江戸川コナン!!」

「……………へえ」にやり

「……………」

「江戸川コナン？変な名前ねえ」

「僕の家シャーロックホームズ大好きだから!!」

「新一と一緒ねー」

「ギクツ」

一瞬にしてコナンと阿笠が固まった。

「(そろそろごまかすのも限界かな?)」

「この子の従兄が探偵をしていてね。その影響もあつてコナン君もホームズ好きで、小さい時から絵本よりも推理小説を読んでた子だったんだよ。」

「へえ……賢いのねえ」

「うん。」

太宰のしれつと設定(嘘)をしゃべる様子コナンは幸いと便乗し盗聴をしていた翼は白い目で太宰を見ていた。

「そういえば、あなたは?」

「おっと、これはこれは失礼しました。私、こういうものです。」

名刺を差し出す。

「まあ、探偵なんですね!!父と一緒にです。父、毛利小五郎も米花町で探偵をしているんですよ。」

私、毛利蘭といいます。

「そうじゃ、毛利君とここにコナンを預けるのがいいのではないか」

「え／＼はい？」

「確かにそれがいいかもしれませんがね。」

太宰も便乗する。

その間に抗議していたコナンを博士が説得し、納得させた。

「父に相談してみないと……」

「確かに、その通りだ。なら今すぐ行きましょう。もちろんお願いする立場ですから私も同行させていただきますよ。」

「蘭姉ちゃん。太宰さんの車すつごく大きいんだよ!!」

阿笠邸を後にするのだった。